【付録】

① 2018年度 実施入学前教育 実施報告書

② 2019年度 全学初年次教育
「自立と体験１」実施報告・データ記録

③ 2019年度「自立と体験 2」授業実施報告書

④ 2019年度「自立と体験 3」授業実施報告書

⑤ 2019年度 全学キャリア形成科目「自立と体験４」実施報告

⑥ 2019年度「キャリアデザイン A」授業実施報告書

⑦ 2019年度「キャリアデザイン２」授業実施報告書

⑧ 2019年度 明星教育センター 自校史教育事業報告

学部長20190711-17

2019年7月11日　学部長会提出

2019年7月4日

学長　大橋　有弘　殿

明星教育センター担当副学長　菊地　滋夫
明星教育センター長　西本　剛己

2018年度　全学入学前教育プログラム実施報告書

Summary（概要）

全学入学前教育プログラムの目的のうち、「大学生活への夢や期待を高める」および「学ぶ意欲を引き出す」ことについては、スタートアップ講習や特別講座などの既存のプログラムにより、目的は概ね達成されたと思われる。「基礎学力」についてもプレテストと修了テストのスコアの比較から、概ね向上していることがわかる。さらに「学び続けることの重要性を認識させる」についても、通信教育（e ラーニング）の課題達成率が上昇したことから、目的達成に向けて一歩前進した。スクーリングへの参加者が少ないという昨年度からの懸案事項についても、2018年度は、参加者が飛躍的に上昇したことからその改善をみた。

・2018度の全学入学前教育プログラムでは、入学予定者に対し、（1）スタートアップ講習、（2）通信教育、（3）フォローアップ講習、（4）スクーリング、（5）特別講座を実施した。
・スタートアップ講習における入学予定者同士及び在校生との関わりは、入学後の大学生活をイメージする良い機会になったのではないかと思われる。
・通信教育では、昨年度よりも高い課題達成率となり、真剣に学習に取組む姿勢がみられた。
・フォローアップ講習の対象者は主要3科目（英語、数的処理・理系数学、国語）の平均進捗率が50%未満の入学予定者とした。参加者は26名（昨年度は46名）であった。
・スクーリングには、その一環として行った講座への参加者が飛躍的に増加したことにより、222名（昨年度は22名）の参加があった。
・特別講座には、294名が参加し（昨年度は222名）、活発な交流がなされた。
・次年度への課題として、①通信教育実施後のフォロー体制の充実、②一般入試合格者に向けての入学前教育の充実、等が挙げられる。

1　はじめに

2018年度の入学前教育プログラムは、（1）大学生活への夢や期待を高める、（2）学ぶ意欲を引き出す、（3）基礎学力を向上させる、（4）学び続けることの重要性を認識させる、を目的として実施した。

（1）大学生活への夢や期待を高める

AO入試合格者・推薦入試合格者を対象として実施したスタートアップ講習（2018年11月11日（日）、2018年12月23日（土）、2019年1月12日（土））における「大学生活スタート講座」や「学科交流会」を通じて、2019年4月以降の大学生活をイメージさせることができた。

（2）学ぶ意欲を引き出す

AO入試合格者・推薦入試合格者、及び一般入試（前期・中期）合格者を対象として実施した特別講座（テーマ「大学での学びを体験する」）や、スクーリングの一環として実施した「やる気！応援プロジェクト！」講座の実施

によって、学ぶことへの意欲を引き出すことができた。

（3）基礎学力を向上させる

AO入試、推薦入試合格者を対象にしたスタートアップ講習時のプレースメントテスト（以下、プレテスト）の成績に応じたレベル別の通信教育を、スタートアップ講習後から2月末日までの間、e ラーニングで継続的に学習してもらった。その結果、科目によってばらつきはあるものの、総じて学力を向上させることができた。

（4）学び続けることの重要性を認識させる

e ラーニングでは、受講生の脱落防止に重点を置き、学習状況の把握に努めた。学習が滞ったときは速やかに学習支援（電話やメール等で学習を促す）を行った。通信教育の英語・国語・数学（数的処理・理系数学）の3科目の平均進捗率が50%未満の入学予定者に対しては、3月20日（水）にフォローアップ講習を実施した。

通信教育（e ラーニング）に関する詳細は、委託業者（株式会社ワオ・コーポレーション）による「2019年度入学生対象 明星大学 入学前教育 結果報告書」）を参照されたい（学部支援室に配置）。

2　全学入学前教育プログラム実施概要

2－1　プログラムの構成

入学予定者に対して（1）スタートアップ講習、（2）通信教育（e ラーニング）、（3）フォローアップ講習、（4）スクーリング、（5）特別講座を実施した。実施日程及び各プログラムの概要は、以下の表1、表2の通りである。

2－2　実施日程（表1）

	7・8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
対象者			AO9月 AO10月	AO11月、指定校、スポーツ・文化活動特別、卒業生子女特別	公募制			
大学全体のプログラム	学科主任説明会（7月下旬）		①～⑤				学科入学前プログラム	
① スタートアップ講習(1)	プレテスト問題検討		11日（日）	23日（日）	12日（土）			4月3日及び5日アセスメントテスト
② 通信教育(1)	eラーニングコンテンツ検討							
③ フォローアップ講習(1)							20日（水）	
④ スクーリング(1)								
⑤ 特別講座(1)(2)							20日（水）	

（1）AO9月、AO10月、AO11月入試合格者、推薦入試合格者（指定校、公募制、スポーツ・文化活動特別、卒業生子女特別など）
（2）一般入試（前期、中期）、大学入試センター試験利用など

表３　スタートアップ講習の対象者・参加者

※明星高校特別推薦・併願は希望者のみ

	実施日	対　象	対象者(a)	参加者(b)	参加率（b/a）	保護者出席状況（上段：組、下段：人）
1	2018年 11月11日（日）	AO9月、AO10月	443 人	410 人	92.6 %	379 (組) 455 (人)
2	2018年 12月23日（日）	AO11月、指定校、スポーツ・文化活動特別、卒業生子女特別	666 人	626 人	93.9 %	554 (組) 601 (人)
3	2019年 1月12日（土）	公募制	41 人	36 人	87.8 %	28 (組) 34 (人)
合　計			1,150 人	1,072 人	93.2 %	961 (組) 1,090 (人)

（1）プレテスト

英語・国語・数学（数的処理・理系数学）の３科目について、スタートアップ講習時に大学内で受験してもらった。

受験者アンケートの集計（参加者1,015名中回答者974名）によると、英語では47.1%（昨年度は50.2%）が「とてもむずかしかった」「むずかしかった」と回答し、52.6%（昨年度は49.8%）が「とてもやさしかった」「やさしかった」と回答している。国語では30.2%（昨年度は31.9%）が「とてもむずかしかった」「むずかしかった」と回答し、69.6%（昨年度は68.1%）が「とてもやさしかった」「やさしかった」と回答している。数学（数的処理・理系数学）では26.9%（昨年度は32.3%）が「とてもむずかしかった」「むずかしかった」と回答し、73.2%（昨年度は67.7%）が「とてもやさしかった」「やさしかった」と回答している。

以上のことから、英語・国語・数学のプレテストの問題を「とてもやさしかった」「やさしかった」と感じる入学予定者が、昨年度よりやや増えていることがわかる。

表４　プレテストの難易度（%）

	英語		国語		数学(数的処理・理系数学)	
	2018 (年度)	2017 (年度)	2018 (年度)	2017 (年度)	2018 (年度)	2017 (年度)
とてもむずかしかった	3.3	3.1	1.4	2.4	3.0	5.0
むずかしかった	43.8	47.2	28.8	29.5	23.9	27.3
＜小計＞	47.1	50.2	30.2	31.9	26.9	32.3
やさしかった	47.5	45.3	58.4	56.0	47.7	47.6
とてもやさしかった	5.1	4.4	11.2	12.2	25.5	20.1
＜小計＞	52.6	49.8	69.6	68.1	73.2	67.7
＜合計＞	99.7	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0

（2）大学生活スタート講座

① 導入
② 自己紹介
③ 「大学生活準備度」チェック
④ 通信教育ガイダンス（e ラーニング委託業者が担当）
⑤ 校歌紹介
⑥ 振り返り

２－３　各プログラムの概要（表２）

	目的	対象	実施日	主な実施内容
スタートアップ講習	・年内合格者が入学までの期間を有効に使うための動機付けを行う	AO・推薦入試合格者	第1回 2018年 11月11日 第2回 2018年 12月23日 第3回 2019年 1月12日 （学科交流会実施せず）	・(1)～(4)のプログラムを実施
(1)プレテスト	・通信教育のレベル分けを行う			・英語、国語・数学（数的処理・理系数学）
(2)大学生活スタート講座	・入学前の準備を確認する ・通信教育実施への動機付けを行う			・自己紹介、大学生活準備度チェックなどのグループワーク ・通信教育ガイダンス ・校歌の紹介
(3)学科交流会	・入学する学科の上級生や教員と接し大学生活のイメージをつくる			・学科毎に各教室に分かれて実施 ・内容は学科の判断による
(4)保護者ガイダンス	・入学予定者の保護者に明星大学を理解してもらい、入学までの準備への協力を求める	上記の保護者		・大学の歴史、現状、教育理念、教育方針、入学前プログラムに関する説明およびDVD上映 ・在学生スピーチ
通信教育（e ラーニング）	・入学後の学習に必要な基礎学力の修得 ・学習習慣の獲得	AO・推薦入試合格者	2018年12月～2019年2月	【必修科目】 国語、英語、数学（数的処理、理系数学）、論作文 【選択科目】 物理、化学、力学（学科、コースによって異なる）
フォローアップ講習	・入学後の学習に支障をきたさないようにフォローする ・学習ステーションについて知る	2019年2月28日時点において通信教育の主要3科目（英語、数学、国語）の平均進捗率が50%未満の入学予定者	2019年 3月20日 （水）	・大学生活で学習を自己管理する意味を考えさせるためのグループワーク
スクーリング	・通信教育をサポートする ・大学生活の準備を促し、学習への意欲付けを行う	スタートアップ講習参加者	2019年 2月～3月	・通信教育の課題に関する質問をしたい場合、さらに勉強したい場合に活用する ・大学生活を送る上で有益な講座を受講する
特別講座	・一般入試合格者に対して入学前教育の機会を提供する ・大学での学びの入口を体験し、発想を広げる	一般合格者（前期・中期） AO・推薦入試合格者	2019年3月20日（水）	・大学の授業を体験する ・自分が受けた授業を他のグループメンバーに報告し、それを題材として大学での学びについて考える

３．実施結果

３－１．スタートアップ講習

2018年11月11日（日）、2018年12月23日（日）、2019年1月12日（土）に実施した（表３）。

参加者は合計1,072名（対象者1,150名、参加率93.2%）で、参加率は昨年度より6ポイント増加した。

＜参考＞2017年度：対象者1,064人、参加者928名、参加率87.2%

（3）学科交流会

各学科の教員および在校生に協力してもらい実施した（参加教員は延べ23名、在校生は延べ68名）。

アンケート集計によると、「よかった」「まあまあよかった」という評価が96.9%であった。アンケートの自由記述の回答をみると、「先輩の話を聞いて、理解を深めることができた」「とても有意義な時間だった」「4月からの大学生活がとても楽しみになった」等の肯定的な意見が多かった。

入学予定者同士及び在学生との関わりは、入学予定者にとって入学後の大学生活をイメージする良い機会になったのではないかと思われる。

（4）保護者ガイダンス

明星大学の歴史・現状・教育理念・教育方針および入学前教育プログラムについての理解を促し、入学までの保護者への協力を求める内容で実施した（①～④）。

① DVD上映／教育理念・方針の説明
② 入学前教育プログラムの概要説明
③ 大学事務局からの説明　（入学後の学生生活を円滑にスタートさせるための保護者へのお願い）
④ 在学生からスピーチ

アンケート集計（出席者961組中回答者860組）によると、97.7%が「とても参考になった」「やや参考になった」と回答し、高い評価を得ることができた。

3－2　通信教育

eラーニングにより実施

（1）実施科目（表5）

必修科目：英語、国語、小論文、数学（数的処理・理系数学）

選択科目：物理、化学、力学

（2）2017年度からの変更点（表6）

英語の成績上位者（Sレベル：プレテスト72点以上）に対して実施したeラーニングのTOEIC®講座受講者、及び明星高校からの入学予定者に対して、「All English」講座受講（任意）の機会を提供した。

表5　学部・学科別実施科目

学部・学科		英語	国語	小論文	数学	物理	力学	化学
理工	総合理工	○	○	○	理系数学	※2	※2	※2
人文	国際コミュニケーション	○	○	○	数的処理			
	日本文化	○	○	○	数的処理			
	人間社会	○	○	○	数的処理			
	福祉実践	○	○	○	数的処理			
経済	経済	○	○	○	数的処理			
情報	情報	○	○	○	理系数学			
教育	教育	○	○	○	※1	※2		※2
経営	経営	○	○	○	数的処理			
デザイン	デザイン	○	○	○	数的処理			
心理	心理	○	○	○	数的処理			

※1 理系コース：理系数学，理系コース以外：数的処理

※2 コース・学系により実施

表6　通信教育の変更点

	2018年度	2017年度
実施科目	・変更なし	【必修】英語、国語・小論文、数的処理・理系数学 【選択】物理、力学、化学
提出方法	・変更なし	・eラーニングで実施 ・ポータルサイトとして明星LMSを活用
レベル別対応	・英語の成績上位者（Sレベル）に対しTOEIC®対策講座を受講させるとともに「All English」講座※受講（任意）の機会を提供した ※スクーリングの一環として実施	・英語の成績上位者（Sレベル）に対しTOEIC®対策講座を受講させるとともにCASEC※受験（任意）の機会を提供した ※株式会社教育測定研究所が開発・運営を行っている24時間受験可能な英語テスト
費用負担	・変更なし	・変更なし

（3）課題達成率および実施結果

今年度の科目別の課題達成率をみると、英語95.3%（昨年度比プラス5.7ポイント）、国語95.8%（同プラス4.1ポイント）、数的処理95.7%（同プラス5.5ポイント）などとなっている（表7）。入学予定者それぞれのeラーニングによる学習状況をモニターし、学習が滞り気味の者については、電話、メール、郵便等での励ましによる脱落防止対策を丁寧に講じたことが、課題達成率の上昇に寄与していると考えられる。また学科により傾向が見られた。

さらに、スタートアップ講習で実施したプレテストの得点と、通信教育終了後に実施した修了テストの得点を比較すると、科目によってばらつきはあるものの、全7科目（英語、国語、数的処理、理系数学、物理、力学、化学）で得点が上昇した。

表7　科目別課題達成率（%）

科　目	2018年度 対象者1,149名（a）	2017年度 対象者1064名（b）	（a）－（b）	（参考） 2016年度 対象者968名
英語	95.3	89.6	5.7	87.4
国語	95.8	91.7	4.1	86.2
数的処理	95.7	90.2	5.5	89.7
理系数学	93.9	77.3	16.6	81.7
物理	96.6	100.0	-3.4	73.7
力学	94.7	73.3	21.4	81.7
化学	100.0	73.8	26.2	73.9

※小論文の提出率は　第1回96.6%、第2回96.8%であった。（2017年度は第1回94.6%、第2回91.9%）

3－3　フォローアップ講習

2019年2月28日時点において通信教育の主要3科目（英語・数学・国語）の平均進捗率が50%に満たない入学予定者（49名）を対象に、3月20日（水）に実施した。参加者は26名（昨年度は、対象者98名中参加者46名）となった。

（1）内容

「なぜ通信教育にしっかりと取り組めなかったのか」などを考えさせるグループワーク

（2）結果

グループワークの中で語り合うことを通して、自身の通信教育への取り組みが不十分であったことに気づき、今後改善が必要であることを自覚する機会になったと思われる。

3－4　スクーリング

（1）内容

・通信教育の課題に質問をしたい場合、さらに勉強したい場合に、入学前(2～3月)に学習ステーションの利用を促した。

・「やる気！応援プロジェクト！」講座を実施した。この講座は、「英語講座」「国語講座」「数学講座」「パソコン講座」の４種類を開講した。

（2）結果

スクーリング（「やる気！応援プロジェクト！」講座を含む）の参加者は222名（昨年度は22名）で、講座受講者は延べ1,033名であった。最も講座の参加者が多かったのは「パソコン講座」の延べ411名、次いで「英語講座」の延べ294名であった。

昨年度と比較してスクーリングの参加者が飛躍的（約10倍）に増えた要因には、①講座の案内方法を工夫したこと、②「パソコン講座」を新規に開講した（昨年度は英国数の講座のみであった）ことの２点が考えられる。①については、「やる気！応援プロジェクト！」講座の受講者にアンケートを実施したところ、受講理由として、「郵送されてきたパンフレットを見て興味をもった」という内容が多くみられた。昨年度の講座の案内方法はLMSを通しての通知のみであったことから、スクーリングの講座案内については、次年度以降もパンフレット（紙媒体）を各家庭に郵送し、家庭内で共有できる方法がよいと考えられる。②については、今年度、「パソコン講座」に最も多くの参加者がいたことから、次年度以降も継続し、大学生活の準備を促したい。

3－5　特別講座（テーマ：「大学での学びを体験する」）

AO・推薦入試合格者、一般入試（前期・中期）合格者を対象者とする特別講座を3月20日（水）に実施した。参加者は294名(表8)となった。

（1）内容

①全学共通教育による模擬授業

・４クラスに分け、下記の教員、講座名で模擬授業を行った。

清田洋一先生（全学共通教育）、「大学での英語学習－自分のための豊かな学びをめざして」

清水文直先生（全学共通教育）、「身近な電子材料」

鈴木時男先生（全学共通教育）、「突然売れ出す商品の謎」～「ゼロ円」の商品の謎

西村美香先生（全学共通教育）、「日本の開国と生活様式の変化」

・模擬授業を50分間（前年度は40分間）実施し、その後参加者による10分間のペアワーク（前年度は未実施）により「受講した授業の感想」などを共有してもらう試みを昨年度に引き続き行った。

②明星教育センター教員（平塚大輔先生、南愛先生、福山佑樹先生、太田昌宏先生）によるワークショップ

・全学共通教育の教員による授業を受講し（①参照）、それぞれの授業の受講生が１名ずつとなる４名から構成されるグループを作る

・自己紹介／昼食（グループごと）

・自分が受講した授業についてワークシートを使ってまとめる

・完成したワークシートを使って、それぞれの受講生が受講した授業をグループのメンバーに報告する

・大学での学びについてグループで考える

表８　特別講座の入試区分別参加者

入試区分	人　数	割　合
年内入試（AO入試・指定校推薦入試等）	146 人	49.7%
一般入試・センター試験利用入試	148 人	50.3%
＜合　計＞	294 人	100.0%

（2）アンケート集計（参加者294名、回収291名、回収率99.0%）

得られた回答の98.2%が、「よかった」「ややよかった」と評価している。自由記述の内容をみると、「大学の実際の授業を受けてみて、高校と違い、もっと受けてみたいと思った」、「グループワークなど色々なことをして楽しく学べた」といった、肯定的な意見が多くみられた。

４．課題

次年度は、既存プログラムの内容の改善をさらに進めるとともに、以下の課題に取り組むことで、より適切な入学前教育プログラムの実現を図りたい。

（1）通信教育実施後のフォロー体制の充実

2018年度は、通信教育の主要３科目（英語、数学、国語）の平均進捗率が50%未満の入学予定者をフォローアップ講習の対象者とした。引き続き、2019年度も、学習が滞り気味の者に対する脱落防止対策を講じるとともに、フォローアップ講習に呼び出す基準を厳しく設定し、通信教育実施後のフォローをさらに充実させたい。

（2）一般入試合格者に向けての入学前教育の充実

一般入試合格者については、一般入試（前期・中期）合格者に特別講座を案内し、実施した。2019年度は、一般入試（後期）合格者も含め、一般入試合格者全員に対しても、入学前教育として何ができるかについて検討したい。

以　上

学長　大橋　有弘　殿

2019年度 全学初年次教育「自立と体験１」実施報告書

自立と体験１」担当副学長　菊地　滋夫
明星教育センター長　西本　剛己

Summary（概要）

・2019年度の単位修得率は、95.2%となり、補習を実施していた2016年度以前も含めて、最も高い単位修得率となった。平均出席率87.1%も最高値だった。（本文p.3-4参照）

・例年通り、担当教員向け、SA/TA・SAコーチ向けの研修を実施した。（本文p.4-6参照）
・88名の学生がSA/TAとして授業をサポートし、9名の学生がSAコーチとしてSAをサポートした。SAコーチは5年目となり定着しつつある。（本文p.5-6参照）

・無記名の学生アンケートを1回授業時と15回授業時に実施した。教育目標達成度では、多くの学生が授業を通して「卒業後にしたいこと」や「学生時代にするべきこと」について考えるきっかけを得、学生生活4年間の計画を立てることができていた。この傾向は10年間継続して見られ、今年度も変化はなかった。（本文p.6-7参照）

・自己評価に関する質問では、6項目中5項目で、肯定的回答（「とてもそう思う」「そう思う」）の比率が、第1回から第15回にかけて増加している。コミュニケーション能力の向上、大学理解について授業を通して自信を付けている。「自分の意見を筋道立てて話すことができる（43.2 → 68.5%）」、「自分の意見を文章でわかりやすく表現できる（34.8 → 60.2%）」は、変化が大きかった。（本文p.8-11参照）

・授業の特徴に対して学生たちは好意的に捉えており、5項目中4項目で肯定的回答が10年間の最高比率となった。特に『少人数クラス』（92.9%）、『他学部・他学科の学生との交流』（94.6%）、『グループでの学習活動』（95.2%）が役に立ったと肯定的に支持している。（本文p.11-13参照）

・「ためになった授業」を尋ねる質問（複数回答可）では、「自分の特徴を知る（第13回）」（51.1%）、「新しい環境で他者と出会う（第2回）」（48.2%）、「自分や相手の大切さを知る（第二節ローテーション授業）」（46.3%）のベスト3は昨年と変わらず、昨年度改訂した第13回が第2位から第1位となった。「自分を知る」ということへの学生の関心の高さが窺える。（本文p.13-15参照）

・担当教員向けアンケートでは、1年生にとって「ためになった授業」として、「自分や相手の大切さを知る」（第二節ローテーション授業）、「聴いて相手を理解する」（第4回）、「大学職員に取材する」（第二節ローテーション授業）が1、2位にあがった。その他の授業についても、14回のうち10回分の授業に対して過半数（16名以上）の教員が「ためになった」と回答した。（本文p.16-17参照）

・「自立と体験１」は2019年度で10年目を終え、その区切りの年に、第1回初年次教育学会教育実践賞最優秀賞を受賞した。今後も、より良い授業実施に向け、引き続き努力を続けたい。（本文p.17-18参照）

・次年度に向けて、授業内容等の改善については今後も継続していきたい。今年度の授業実施の中で見えてきた具体的な改善点として、①SAのモチベーション向上につながる働きかけ、②第二節ローテーション授業の改善、③ポートフォリオのさらなる活用を検討していきたい。（本文p.17-18参照）

１．授業概要

1.1　教育目標

明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け、各自の理想や目的を明確にしていくこと

1.2　行動目標・到達目標

他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること

1.3　授業内容（2018年度からの変更点）

2019年度の授業内容は表1のように実施した。2018年度からの主な変更点は次の通りである。

(1) 配付資料の変更・追加

・「ジリタイまなブック」をポートフォリオと合わせて配付した。「学ぶ力自己点検」「大学生活デザインシート」記入時に活用した。

・ローテーション授業「自分や相手の大切さを知る」で配付する「ハラスメント」に関する資料の内容を変更し、新規作成した。

・本学の学生が障がいのある学生の理解を深める機会の一環として、第15回授業内で、追加資料「バリアのないキャンパスに」を配付した。これは、学長からの依頼（「30明星大学ー第46号」）に基づき、ユニバーサルデザインセンターの協力を得て作成したものである。

(2) ポートフォリオの変更

・ポートフォリオの記述内容、表現、掲載位置等の修正、追記等、18カ所の変更を行った。

(3) 臨時休講への対応について

・京王電鉄の停電により、7月19日(金)1・2限の授業が臨時休講となった。それに伴い「大学生活デザインシート」の提出をもって出席とみなす対応をとった。

表1　第1回ー第15回の授業名

	回	授業名		回	授業名		回	授業名
第一節	1	オリエンテーション	第二節	7	明星大学を知る（合同授業・ローテーション授業）	第三節	12	卒業生から学ぶ
	2	新しい環境で他者と出会う		8	明星大学を紹介する（ローテーション授業）		13	自分の特徴を知る
	3	大学での学びを考える		9	図書館にふれる（合同授業・ローテーション授業）		14	これからの大学生活を描く
	4	聴いて相手を理解する		10	大学職員に取材する（ローテーション授業）		15	未来の自分へのメッセージ
	5	話しあいを体験する		11	自分や相手の大切さを知る(ローテーション授業)			
	6	ルールとマナーを考える						

２． 実施結果

2.1 開講曜日・時限・設置クラス数等

１年生前期必修科目として 70 クラスを開講した。開講曜日・時限・設置クラス数は、金曜日 1 時限 23 クラス、金曜日 2 時限 27 クラス、土曜日 1 時限 9 クラス、土曜日 2 時限 9 クラスであった。

授業は、各学部専任教員 39 名、明星大学教育センター教員 9 名、および非常勤講師 4 名が担当した。1 クラスあたりの履修学生数は 27-30 名であった。

2.2 履修者数

履修者数は 2,024 名（4 月 1 日時点）であった。

2.3 出席率

2019 年度の平均出席率は、表２の通り 87.1%で 2018 年から微増となった。第 15 回の出席率は 84.4%と、昨年の 74.1%と比較して大きく上昇した。しかし、これは 2019 年度においては第 14 回の金曜日１，２限が休講となり、第 15 回授業において第 14 回の授業内容に相当する課題の提出を行うことで、第 14 回授業を出席と見なすという臨時措置をとったため、この課題の提出を目的として多くの学生が出席したものと考えられる。※14 回の出席率は勉天データ未修正の 3 クラスを除外している。

表２ 「自立と体験１」各年度の出席率

年度	2019 年度	2018 年度	2017 年度	2016 年度	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度	2011 年度	2010 年度
出席率	87.1%	86.5%	86.5%	86.7%	85.5%	85.2%	84.5%	85.1%	84.9%	82.7%

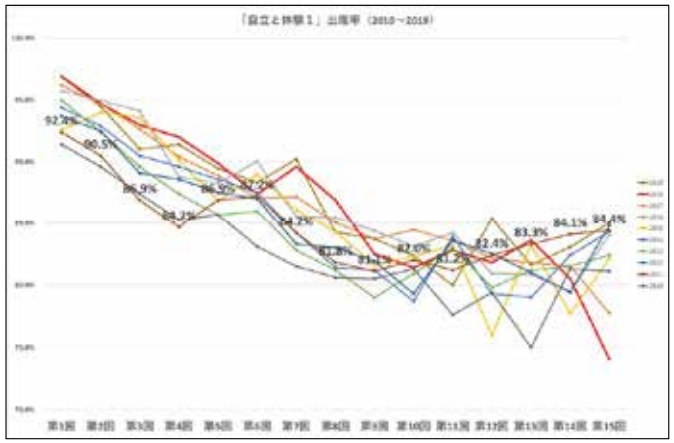


図１ 「自立と体験１」出席率の推移

2.4 単位修得率

2010 年度以降の「自立と体験１」の単位修得率は表３の通りである。2019 年度の単位修得率は 95.2%となった。このため単位修得率は 2010 年度以降最高となった。

表３ 「自立と体験１」単位修得率

年度	2019 年度	2018 年度	2017 年度	2016 年度	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度	2011 年度	2010 年度
単位修得率（正規授業）	95.2%	95.1%	94.0%	93.9%	92.1%	91.3%	91.5%	91.0%	88.5%	89.9%
単位修得率（補習を含む）	補習実施せず	補習実施せず	補習実施せず	95.1%	93.4%	93.6%	93.8%	94.0%	91.4%	93.9%

2.5 担当教員向け研修

担当教員向けに、以下の事前研修（表４）を実施した。

表４ 事前研修（事前説明会及び授業手法説明会）の概要

	事前説明会	授業手法説明会
日程	2019 年 3 月 1 日／11 日 2・3 限 （同内容・どちらか 1 回参加）	2019 年 3 月 1 日／11 日 4 限 （同内容・どちらか 1 回参加）
目的	授業のねらい・到達目標を理解する 全 15 回の授業内容・教案を理解する 授業運営のためのサポート体制を理解する	グループ学習について理解する 授業を担当するイメージをつかむ
内容	①本日の目的と内容 ②開講挨拶 ③「自立と体験１」の特徴（VTR 投影、授業の特徴的ポイント、9 年間の実践の成果（学生アンケート等）） ④「自立と体験１」の意義（大学の教育目標との関連、外部からの評価、大学 4 年間の学習への効果） ⑤SA・TA について ⑥教員の役割・サポート体制 ＜昼食・教員間交流＞ ⑦気になる学生への対応 ⑧明星教育センターのサポート体制 ⑨教案の見方・授業の概要 ⑩グループワーク（第３節授業の体験・学生にどのように教えるかの検討）	①趣旨説明 ②グループ学習とは ③授業手法体験 ④スキル紹介と解説 ⑤振り返りの体験とまとめ

上記の研修の対象者は、事前説明会が全担当教員、授業手法説明会は初めて担当する教員と希望者である。当該日程の研修会欠席者に対して、別に個別対応することで、参加率は100%となっている。

前年度の振り返りをもとに内容を改善しながら、今年度も例年通り実施した。2019年度の担当教員アンケートでは、全回答31名中31名が時期・内容ともに適当と回答した。具体的には「授業内容が具体的に理解できて心の準備ができた。」、「新たな情報(問題を抱えた学生への対応など)を聞くことができてよかった」「他の先生との交流（情報交換）が、有効であった」などの意見があった。

2.6　SA/TA・SAコーチの運用に関して

(1)SA/TA

2019年度は、開講70クラスに対して、88名の学生がSA/TAとして授業のサポートを行った。

SA/TAに関しては、前年までの振り返りをもとに、2019年度も見直しを行った。主な変更点は、①9月説明会の再開、②SA基本業務一覧表の改定、③日報への明星LMSの活用、④SA交流会の開催である（詳細は表5参照）。特に今年度から新たに取り入れたSA交流会や日報のLMS化とそのチェック体制の構築によりSAへのフォロー体制が充実化してきており、これらは、来年度も改善しながら継続することを予定している。来年度もSAがモチベーションを持って業務に望めるように働きかけていきたい。

また、2017年度から実施している「SA振り返り会」は、SA体験の意味づけとSAの活躍に対する慰労をねらいとして、2019年度も実施した。

(2)SAコーチ

2019年度は、9名の学生がSAコーチとしてSAのサポートを行った。

2018年度からの変更点は、①SAコーチ業務説明書の修正、②日報のLMS化への変更、③担当教員へのSAコーチの役割の周知の徹底である。

５年目となりSAコーチも役割が定着しつつあるが、来年度に向けてさらなる改善を予定している。

表5　SA/TA運用の詳細

日程	内容	詳細・2019年度からの変更点
2018年 7月24日-29日 9月10日-15日	SA説明会 （第14回授業でチラシ配布）	９月の説明会を再開。 参加者286名
7月20日-9月22日	SA申込書提出（明星LMS経由）	①SA/TAを希望した理由 ②どんなSA/TAになりたいか 申込者130名
10月15日-20日 10月22日-25日	意思確認面接	勤務歴があるA評価の学生は免除 申込書提出者全員と個別面接。
12月7日-12月14日 1月31日	コミュニケーションスキルの研修会（希望者参加）	①ストロークスキル編3回（参加者数47名） ②スピーチスキル編3回（56名） ③ファシリテーションスキル編2回（21名）
2019年1月11日-21日	雇用手続き	研修と切り離して実施。 雇用手続き者133名（勤労奨学生含む）

3月26日-29日	勤務可能日提出 （雇用手続き者）	LMS経由
4月4日	SA・SAコーチ内定者発表	MEC事務室掲示 SA88名、SAコーチ9名
4月5日	担当クラス発表	
4月4日-6日	SA業務説明会	勤務決定者を対象に実施。
5月10日	SA交流会①	5限に実施。参加者6名。座談会形式。
6月14日	SA交流会②	昼休みに実施。テーマを決めて、全体で話し合うような形式。参加者14名。
7月5日	SA交流会③	昼休みに実施。グループごとに自由に話し合うような形式。参加者12名。

３．授業評価

授業改善を目的として、第1回授業時と第15回授業時に履修学生に対して「自立と体験１」オリジナルの学生アンケートを実施している。各設問の回答結果は、図2-図14である（集計にあたっては記述なしの無効回答を除いた）。初年度（2010年度）からの10年間の経過も交えて、教育目標の達成、学生の自己評価、学生の反応について考察する。

3.1　教育目標の達成度について

教育目標（明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け、各自の理想や目的を明確にして行くこと）の達成度については、２つの質問で尋ねている。

「卒業後にしたいこと（進路）を考えていますか？」（図2）に「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的に回答した学生は、第1回が67.9%、第15回が70.2%であった。また、「とてもそう思う」の回答も第1回29.8%から、第15回35.2%へと増加している。卒業後にしたいこと（進路）については授業開始前から考えることができていた学生はさらに考える機会となり、また考えていなかった学生にも考える機会を与えたことが考えられる。

自由記述欄では、「これからどのように生きていくか、自分の将来について考えることができ、ためになりました」、「自分の将来を見つめなおすことができた。この授業を受けていなければ、こんなにも将来を見つめなおし、４年間で何をするべきかは考えなかったと思う」「卒業生の話の中で自分の行きたい道を歩んでいる方がいたので参考になった」など、４年後を考えながら大学生活を送るきっかけを得た学生がいたことが見て取れた。

次に「学生時代にするべきことを考えていますか？」（図3）への肯定的回答は第1回81.8%、第15回85.9%であり4.1%増加した。また、「とてもそう思う」の回答も第1回20.6%から、第15回28.8%へと大きく増加している。このことから「学生時代にするべきこと」では、授業を受講したことで、初回授業において肯定的に回答している学生の中にも変化が見られたことが分かる。自由記述欄には「大学設備や授業内容について知らない情報を取り入れることができた。人脈も広がり、自分の大学生活を豊かにする知識を身につけることができた」、「4年間で自分の学生生活について、なんとなくは思っていても実際に計画を立てることはしなかったため、計画を立てられて良かった」「どう４年間を過ごす

かを具体的に見直すことができた」などがあり、こちらもこの授業で４年間を考えるきっかけを得ていることが分かった。

学習目標全体としては、多くの学生が「卒業後にしたいこと」や「大学時代にするべきこと」について授業内で考えることができたと考えられる。この傾向は 10 年間継続して見られており、本年度も例年通りの傾向が見られた。１年前期の初年次教育科目としての教育目標の達成は 10 年間継続して行えているといえる。

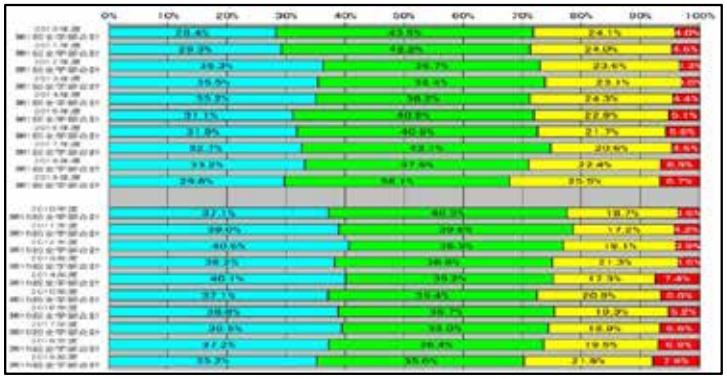


図２　卒業後にしたいこと（進路）を考えていますか？

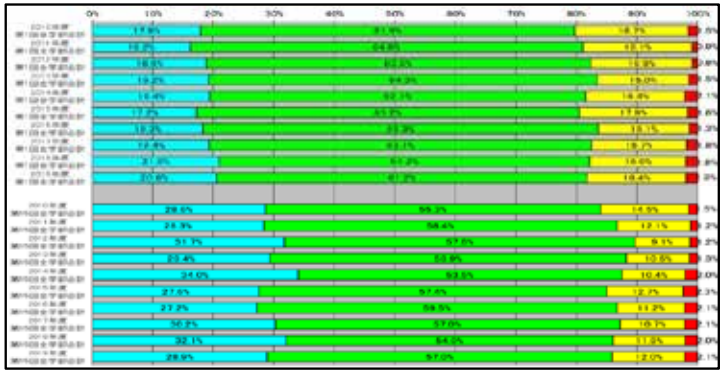


図３　学生時代にするべきことを考えていますか？

■とてもそう思う　■そう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

3.2　学生の自己評価について

６つの設問で学生に自己評価を尋ねている（図 4-図 9）。第１回授業時と第 15 回授業時の「とてもそう思う」、「そう思う」の肯定的回答の比率は全体としてはここ数年とほぼ同様の数値を示している。

「敬意・関心を持って他者の話を聞くことができますか？」については、92.9%の学生が「自立と体験１」受講前からできていると考えており、第 15 回授業後も 91.9%と同程度の数値を示している。しかし、「とてもそう思う」の数値の比較では 33.8%から 43.7%へと 9.9 ポイント増加している。この第 15 回授業後に「とてもそう思う」と回答する学生の割合は、2011 年度以降一貫して高まっており、授業が上位層の「相手への敬意、関心」を高めることができていると共に、入学する学生の質が高まっていると考えられるのではないだろうか。

一方、入学当初は半数以上の学生が自信のなかった「自分の意見を筋道立てて話すことができますか？」は 25.3%ポイント増加（43.2%→68.5%）、「自分の意見を文章でわかりやすく表現できますか？」は25.4ポイント増加(34.8%→60.2%)となり、授業を通してできるようになったと自己評価している。「自分の意見を筋道立てて話す」について自由意見欄には「自分の意見を筋道立てて話すことは苦手だったけれど、自立と体験１で少し克服できた」、「自分の意見を相手に伝える大切さを学ぶことができたこと。ただ伝えるだけでなく、相手にいかに分かりやすく伝えることができるのかを考え直すことができた」など授業でこの力を身につけられたという記述があった。

また「明星大学の歴史や教育の特徴を知っていますか？」（23.1%→49.8%）、「大学の図書館の利用方法を知っていますか？」（49.4%→88.9%）も理解できたと回答する学生が増加している。学長の話を聞いたり、先輩の話を聞いたり、実際に図書館で本を探したりするという体験を通しての学びが非常に有効であることがわかる。

自由意見欄には、「明星大学を外側と内側から知ることができた」「明星大学を深く知ることができて、より一層興味が湧きました」などの意見があり、授業以前には明星大学について知る機会が学生にはあまりなく、「自立と体験１」を通して学生たちは明星大学の歴史や教育理念を学んでいることがわかる。

また「規律を守って学習活動ができますか？（無断欠席や遅刻しない、など）」（90.6%→71.4%）は例年通り、授業の前後において低下している。これは初回から 15 回目にかけての出席率の低下と学生の自己評価との関連が考えられる結果となっている。

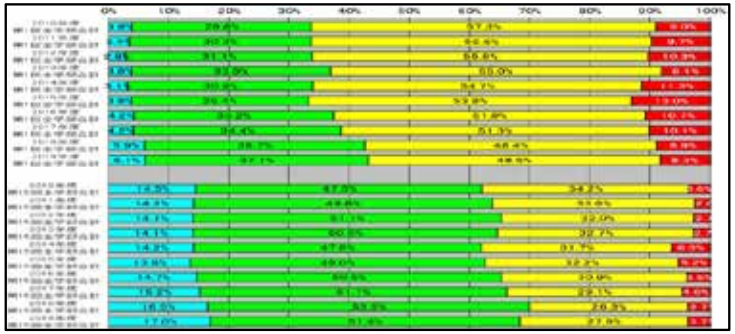


図4　自分の意見を筋道立てて話すことができますか？

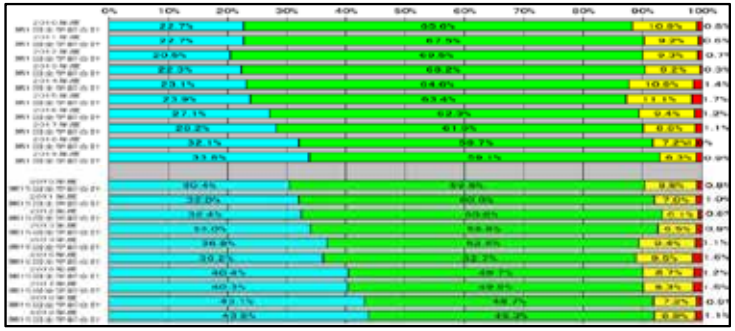


図5　敬意・関心を持って他者の話を聴くことができますか？

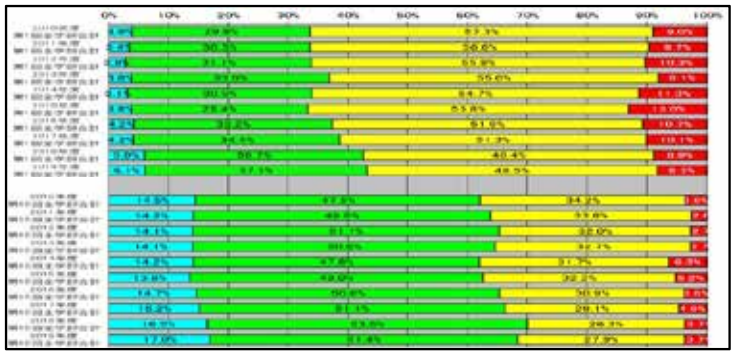


図6　自分の意見を文章でわかりやすく表現できますか？

■とてもそう思う　■そう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

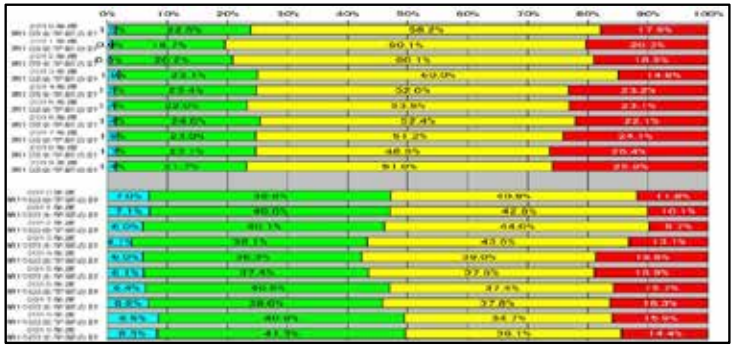


図7　明星大学の歴史や教育の特色を知っていますか？

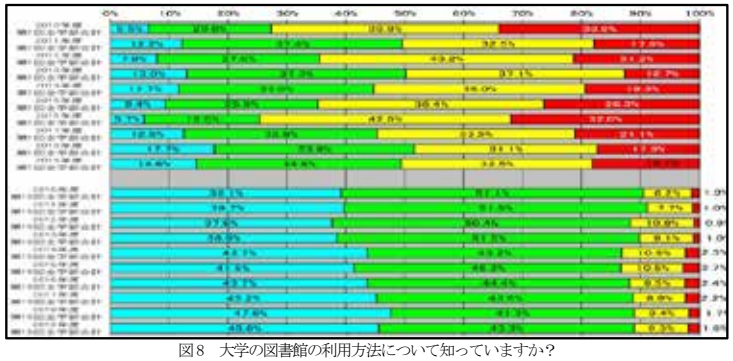


図8　大学の図書館の利用方法について知っていますか？

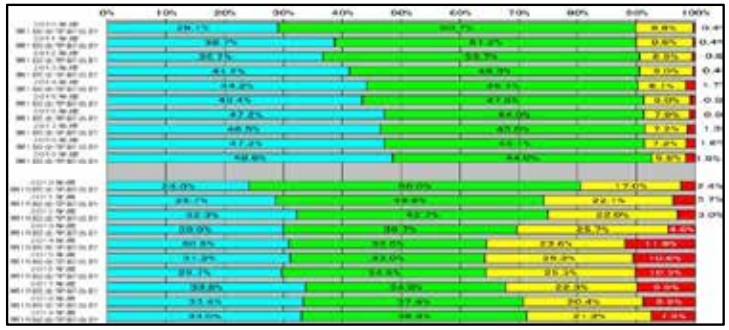


図9　規律を守って学習活動ができますか？（無断欠席や遅刻をしない、など）

■とてもそう思う　■そう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

3.3　学生の反応

(1)授業の特徴に関する質問

「自立と体験１」の授業の特徴については 15 回目の授業のみで５項目を尋ねている。「『少人数クラス』は役に立ちましたか？（92.9%）」（図 10）、「『他学部・他学科の学生との交流』は役にたちましたか？（94.6%）」（図 11）、「『グループでの学習活動』は役に立ちましたか？（95.2%）」（図 12）の３項目全てにおいて、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が過去 10 年で最も高いパーセンテージとなり、学生たちの「自立と体験１」に対する支持が高いことがわかる。自由記述欄には、「多くの他学部の人と知り合えて、さらに友好関係が広がったことが、何よりもうれしいし、受けてよかったと思えた」、「自分の意見だけにとらわれず他の人の意見も聞けたから視野が広がった。また、いろんな考え方の人がいるからこういう考え方もあるなって気づかされたり、このような行動をとれば自分ももっと有意義な大学生活を送れるなというのが分かった」、「グループ活動を通して、考えたことを発信する力、聴く力、深める力を身につけることができて良かったと思いました。明星大学を知ることで、自分が学ぶ場所のことを理解し、学生の意識が芽生えました、他者のことを知ることで、自分のことを理解することもでき、自分と向き合う時間がとれました」などがあり、これらの「自立と体験１」の特徴を学生は好意的に捉えていることが分かる。

また「『ポートフォリオ』は役に立ちましたか？（84.8%）」（図 13）、「課題に取り組むことにより学びが深まりましたか？（84.2%）」（図 14）の２項目も 80%を超える高い数値となっており、前者は過去 10 年で最も高いパーセンテージとなっている。自由記述では「ポートフォリオがあるのでどんな授業するのかわかりやすい」という意見がある一方、「ポートフォリオの活用がもっとできれば良かったです」、「ポートフォリオを書く時間がもう少しほしい」、「ポートフォリオの記入内容がもっと実践的だったらよかったと思う」などの建設的な意見が散見され、学生からポートフォリオの改善に資する声が見受けられたことは、授業の内容を深く理解していると考えることができ、学生の能力が上がってきていることの証左であると考えることもできる。

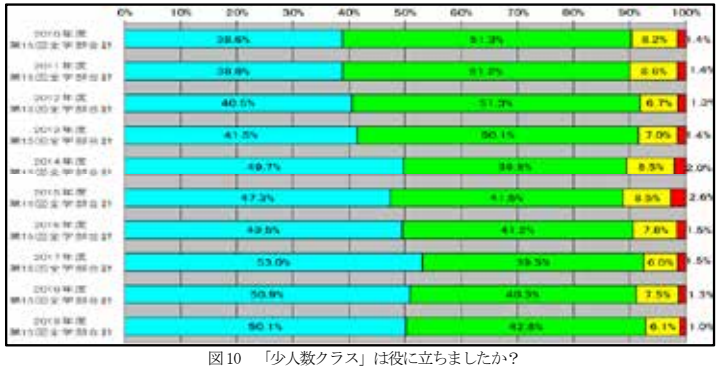


図 10　「少人数クラス」は役に立ちましたか？

■とてもそう思う　■そう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

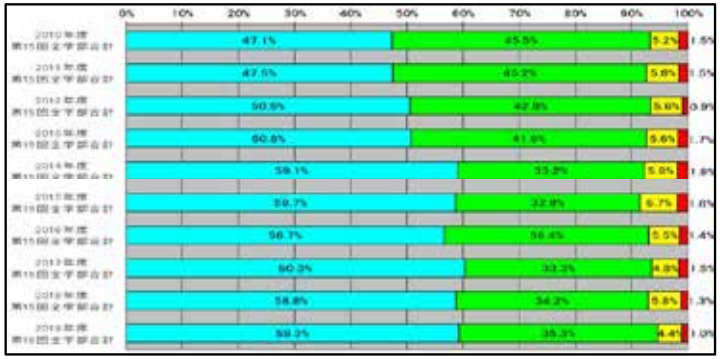


図 11　「他学部・他学科の学生との交流」は役に立ちましたか？

図 12　「グループでの学習活動」は役に立ちましたか？

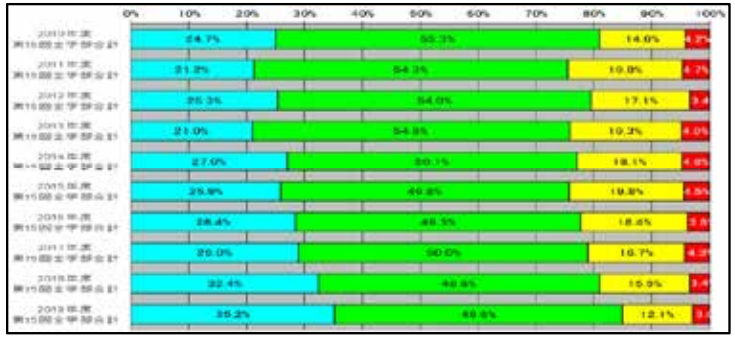


図 13　「ポートフォリオ」は役に立ちましたか？

■とてもそう思う　■そう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

図14　提出課題に取り組むことにより学びが深まりましたか？

■とてもそう思う　■そう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

(2)「ためになった授業」

15回の授業を通して「ためになった授業」とする回答から、学生の反応について考察する（表1および図15参照）。一番学生がためになったと回答したのは第13回「自分の特徴を知る」(51.1%)で、前年度の2位（46.4%）から4.7ポイント増加し第1位となった。第2位はこれまで5年間1位を続けていた第2回「新しい環境で他者と出会う」(48.2%)で、第3位は第11回「自分や相手の大切さを知る」(46.3%)であった。前年度に授業内容が改定された第13回が高い評価を受けたのは、この回の授業内容が「PROG」というアセスメントを用いた「自己理解」となっており、自分を知るということへの学生の関心の高さを示しているといえよう。一方で、第8回の「明星大学を紹介する」のような何かを習うよりも、自分たちで何かを創り出したり自ら考えるような活動の評価が低い傾向にあり、学生にこのような活動の意義をより理解させることが望まれる。

自由記述欄ではそれぞれの回について「PROGの授業は他者と関わる以外の場で自分自身の特徴が理解できた」(第13回)、「自分の特徴を知ることができた。あと、それで何がいかせるか、逆に短所の部分の伸ばし方がわかるようになった」(第13回)、「第5回のようなゲームみたいなワークがもっとやりたかった」(第5回）などがあった。学生の関心が高い回のテーマとしては、大学生活への適応、自己理解、人間関係にあることが見て取れる。

表1　第1回ー第15回の授業名（再掲）

	回	授業名		回	授業名		回	授業名
第一節	1	オリエンテーション	第二節	7	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	第三節	12	卒業生から学ぶ
	2	新しい環境で他者と出会う		8	明星大学を紹介する (ローテーション授業)		13	自分の特徴を知る
	3	大学での学びを考える		9	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)		14	これからの大学生活を描く
	4	聴いて相手を理解する		10	大学職員に取材する (ローテーション授業)		15	未来の自分へのメッセージ
	5	話しあいを体験する		11	自分や相手の大切さを知る(ローテーション授業)			
	6	ルールとマナーを考える						

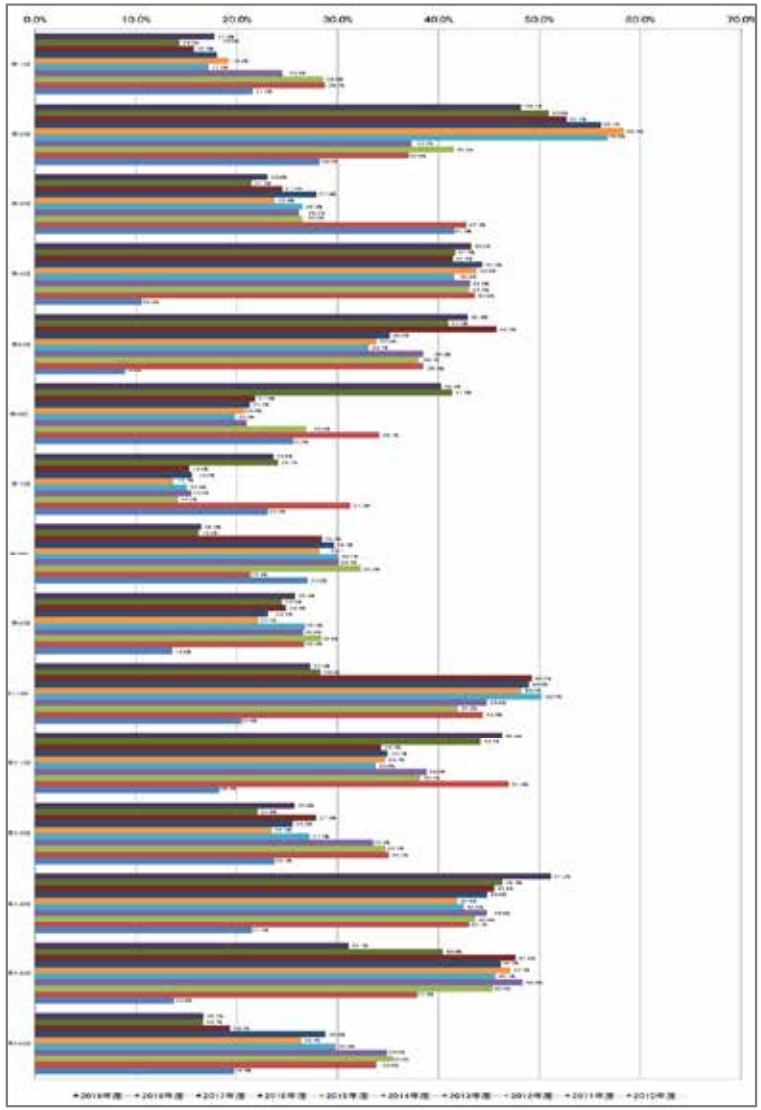


図 15 「ためになった」と思う授業に関する回答の経年比較（2010 年度～2019 年度）
※各年度の割合は回答者のうち「ためになった」と回答した人の比率（無効回答を除いて計算した）

3.4 関係者による授業評価

受講している学生以外の関係者にも、授業終了時にアンケートを実施している。担当教員、SA/TA、SA コーチ、職員インタビューに協力いただいた担当者に対するアンケート結果を抜粋し、授業評価について考察する。

(1)担当教員

回答率 59.6%（52 名中 31 名）であった。学生の変化が特に大きかった点について「他の学生と関わりを持つことに対して積極的になった」「学生自身が自分の成長を自分の言葉で語り、今までの経験を自分なりに意味づけられるようになった」「内的自分に素直に向かい合うことができるようになった」「グループワークやペアワークを通じて、ディスカッションの仕方がうまくなった」「書く速度と内容と量が向上し、ポートフォリオの個人ワークが充実した」「自主的な取り組みの増大・人前での発表の自信向上・目的意識の明確・学びの主体化等が顕著に変化した」といった意見があった。

学生にとって「ためになった」授業ベスト 3 は、第 11 回「自分や相手の大切さを知る」24 名、第 4 回「聴いて相手を理解する」および第 10 回「大学職員に取材する」23 名、第 2 回「新しい環境で他者と出会う」20 名であった。

ためになった理由としては、「未知の体験の場になっている」「人間関係を円滑にする方法や他者と協働することの大切さについて勉強になったという学生が多かった」「大学職員は目に見えないところでいろいろな仕事をしていることを知ることにより、視野を少しでも広げるきっかけになった」「他者と関わり、他者の視点から自分自身を見つめることができることは，たいへん貴重な経験である」「大学生活への不安に対して、大学が居場所になることを受け止めてもらえた」「グループ内での役割分担や相手に想いや考えを伝えるための工夫を考えるなど、社会に出てからも必要となる汎用的能力を意識するきっかけづくりになった」「多様な価値観やグローバル化が進む中で、多様性を意識することを考える機会はとても貴重だ」「社会で生活するひとりひとりには貴重な役割や仕事があり、個性やそれぞれの強みが社会を支えていることを学べる点には大きな意味がある」などの意見があった。

授業を担当してみてどうだったかに関する回答では、21 名が「授業を担当することを楽しんだ」を選び、10 名が「授業を担当することは大変だった」を選んだ。また、19 名が「グループ学習形式の授業は進めやすかった」と回答していた。

SA/TA 関しては 30 名の教員が有効に機能していたと回答した。具体的には「SA に横に座ってもらって一緒に作業を進めることによって笑顔が見られるようになった。SA の一生懸命さが学生の心を開かせたのだと思った」「日々のスピーチだけでなく、日頃の学生を見る温かい眼差しや行動からも後輩たちに伝わるメッセージがあったようだ」「受講学生と年齢が近く親しみやすい。注意なども教員のようにストレートでなく、柔らかく受け入れられていた」「授業の進め方に関して、学生の立場に立ったアドバイスが得られる」「学生と教員の間の潤滑油になってくれた」などの意見があった。

教員が選ぶ「ためになった」授業の票数は分散していた。14 回のうち 10 回分の授業に対して過半数（16 名以上）の教員が「ためになった」と回答していたことから、各教員・クラス毎に異なった意義を持っていたと推測できる。一方、「授業を担当することを楽しんだ」および「グループ学習形式の授業

は進めやすかった」と回答していた教員は約3分の2であったことから、残りの3分の1の教員にとって楽しめる／進めやすい授業のあり方について、今後検討の余地がある。

(2) SA/TA

回答数は回答率37.1%（97名中36名）と、昨年(19.0%)より大幅に上昇した。LMSで回答できるように変更するなど、さまざまな働きかけをおこなったことが作用したと考えられる。1年生の変化については、多くの学生が「徐々に話をするようになった」、「成長した」、「変化があった」という記載をしている。「学部・学科の枠を超えて学生同士が仲良くなった」という意見もあった。1年生にとって「ためになった」と思う授業では、第13回「自分の特徴を知る」26名、第8回「明星大学を紹介する」と第11回「自分や相手の大切さを知る」が17名、第4回「聴いて相手を理解する」と第15回「未来の自分へのメッセージ」が16名であった。ためになった理由として、「相互交流を通じて、皆さんが多様な価値観と触れ合い、認め・認められ、それぞれの大学生活について、考えを深めることができた」「自分がどんな人なのか、どこが他人から見て良いところなのかを知る機会だったため、それを今後に活かすことができると思う」「自分の強みや弱みを理解して書き表すことがためになっていた」といった意見があった。自分自身の振り返りとしては、「授業補助を担当することは充実した体験だった」に35名（1名を除く全員）が「はい」と回答しており、SA/TA自身にとっても何らかの学びや楽しさを得た可能性が指摘できる。

(4) 協力部署

回答数は17名であった。1年生の印象として「真面目」と回答した人が5名、「おとなしい」と回答した人が3名いたのに対し、「積極的」という回答をした人も6名いた。そのうちの多くが、去年に比してそのように感じたということであった。また「決められた質問ばかりであった。もっと積極的になってほしい」という趣旨の回答も3件あった。

インタビューを受けて自分に関して気づいた点等を尋ねた設問には、「日常の仕事を再考した」、「職員としての意識を再確認した」「次回はもっと自分の仕事をイメージしてもらえるような説明を工夫したい」という意見が複数挙げられていて、学び合う関係が「自立と体験1」の授業の中にあることが再認識された。

4．次年度に向けて

「自立と体験1」は2019年度で10年目を終え、その区切りの年に、第1回初年次教育学会教育実践賞最優秀賞を受賞した。審査委員からは「9年間の取組の継続性と改善、全学的な組織的取組と浸透度、などの点において、類似の取組を行う大学にとって有益なモデルとなりうる。また、同取組を通して、進級率、離籍率、卒業率、1年在籍率などが継続的に改善していることも高く評価できる。今後の課題として、成果検証のための複合的な評価方法の検討があげられているが、これについては、eポートフォリオの導入も検討されており、さらなる改善が期待される」との講評を頂いた。今後も、より良い授業実施に向け、引き続き努力を続けたい。今年度は新たな成果検証のために、明星教育センター教員クラスの学生向けアンケートを実施しており、その結果は別途報告したい（研究タイトル「学部学科混合クラスにおけるアクティブラーニング型授業の効果の検討ー多様性と主体性の観点より」）。

2019年度の単位習得率は95.2%となり、補習を実施していた2016年度の「補習を含む単位修得率」を上回った。昨年度も触れたように、入学学生の質の変化により、正規授業で単位が修得できる状況が実現できていると考えられる。

また、「自立と体験1」は、この授業に関係するすべての人から意見を集め、授業内容および授業運営の改善を続けてきており、授業担当教員、各部署の職員、SA/TA、明星教育センターの教職員・勤労奨学生の「教職学協働」が定着しつつある。この改善の姿勢をもって、今年度の授業実施の中で見えてきた以下の3点については、具体的に改善を行っていきたい。

(1) SAのモチベーション向上につながる働きかけ

SA説明会参加者286名、SA申込者130名（p.5-6）と、SAに対する学生達の関心は継続して高い。今年度は、経験者で高評価の学生を選考時に優遇する、SA希望者向けの研修会を実施する（2018年度より）など、よりモチベーションの高いSAに対する働きかけを実施した。SAの主体性を育成するためにも、さらにモチベーション向上につながる働きかけを検討したい。具体的には、優秀なSAの表彰、SAコーチとしての認定制度などが考えられる。

(2) 第二節ローテーション授業の改善

次年度11年目を迎えるにあたり、第二節授業を次の3つの観点から改善したい。①教材のバージョンアップ、②授業内容の改善、③運営方法の見直しの3点である。

①教材は、特に図書館演習、ハラスメントクイズ等は、社会に目を向けるという意味から時代に合わせた変更が必要である。この点については、新たなコラムを取り入れるなどの変更は実施してきているが、次年度に向けてさらなるバージョンアップを検討したい。

②授業内容は、現状でも全体としての満足度は高いものの、アンケートを詳しく見ると、教員と学生の評価の相違が見られ、学生は第二節の授業を「ためになった」と評価していない傾向がある。第二節の授業はインプット型（学内に関する情報を知る）が多く、学生がアウトプット型の授業をより「ためになった」と評価していることも推測される。学生の実感としてはもっともだとは思われるが、教材の見直しに併せ、より第二節の授業内容の充実を検討し、学生にとっての魅力を高めたい。

③運営方法は、第二節が学内の様々な教職員の協力で実施される授業であることから、より関係者に理解してもらえる運営方法が必要となる。「自立と体験1」が学内に定着してきたからこそ、「知っているはず」ではなくきちんと伝え理解いただくということを意識しながら、運営方法の改善も検討したい。

(3) ポートフォリオのさらなる活用

p.11に記載のとおり、アンケートの自由記述欄に学生からポートフォリオの改善に対する建設的な意見が複数記載されている。学生自身の意見を取り入れることで、さらに良いものにすることを目指したい。また授業内の活用方法による違いも考えられるため、担当いただく教員の意見も聴いていきたい。

以上

報告書作成：明星教育センター
石野由香里・太田昌宏・落合一泰・菅原良・鈴木浩子・高橋南海子・平塚大輔・福山佑樹・南愛

2019年度「自立と体験１」データ記録

2019年9月9日現在

１．「自立と体験１」受講学生について

（1）受講生人数（4月1日現在）

2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
2092	2151	2021	2141	1989	2187	2160	2148	2126	2024

（2）出席率

2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
82.7%	84.9%	85.1%	84.5%	85.2%	85.5%	86.7%	86.5%	86.5%	87.1%

（3）「自立と体験１」単位修得率

年度	単位修得率（正規授業）	単位修得率（補習を含む）
2010年度	89.9%	93.9%
2011年度	88.5%	91.4%
2012年度	91.0%	94.0%
2013年度	91.5%	93.8%
2014年度	91.3%	93.6%
2015年度	92.1%	93.4%
2016年度	93.9%	95.1%
2017年度	94.0%	－
2018年度	95.1%	－
2019年度	95.2%	－

・単位修得率（正規授業）は15回の授業時点での修得率、単位修得率（補習を含む）は、補習実施後の修得率

・単位修得率の母数は、4月1日現在の学生数で算出

・2017年度以降は、補習を実施していない

（4）「自立と体験１」補習について

年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度以降
実施時期	夏季休暇期間中		9月～10月					補習実施せず
コマ数	9コマ	9コマ	9コマ	9コマ	9コマ	9コマ	8コマ	
補習対象者	130名	128名	89名	92名	78名	66名 ※2	51名	
申込者 （申込率）	85名	76名 (59%)	73名 (82%)	77名 (84%)	62名 ※1 (79%)	49名 (74%)	35名 (69%)	
合格者 （合格率）	83名 (98%)	67名 (88%)	64名 (88%)	56名 (73%)	44名 (71%)	30名 (63%)	28名 (80%)	

※1　当日、参加1名含む

※2　1名退学、1名診断書提出のため、補習対象者から除かれたため、上記人数から除いている。

（5）4年在籍率（留年・離籍することなく4年で4年生になった率）

	2007年度入学生	2008年度入学生	2009年度入学生	2010年度入学生	2011年度入学生	2012年度入学生	2013年度入学生	2014年度入学生	2015年度入学生	2016年度入学生
進級率	70.2%	66.5%	66.3%	70.9%	72.6%	77.1%	80.4%	78.1%	77.7%	78.1%

・各年度とも5月1日現在の在籍者数で算出

（6）3年在籍率（留年・離籍することなく3年で3年生になった率）

	2007年度入学生	2008年度入学生	2009年度入学生	2010年度入学生	2011年度入学生	2012年度入学生	2013年度入学生	2014年度入学生	2015年度入学生	2016年度入学生	2017年度入学生
進級率	76.7%	74.8%	73.7%	79.5%	81.5%	85.0%	87.3%	86.5%	85.3%	86.5%	86.6%

・各年度とも5月1日現在の在籍者数で算出

２．「自立と体験１」担当教員について

（1）「自立と体験１」担当教員数

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
専任	45	46	45	45	43	43	41	41(※1)	39	39
明星教育センター	5	5	5	5	6	9	9	8	9	9
非常勤	1	1	2	2	3	3	3	4	5	4
合計	51	52	52	53	52	55	53	53	53	52

※1後期専任教員として本学へ着任予定であるが、前期は都合により非常勤講師として担当した学部選出教員を1名含む

（2）2019年度「自立と体験１」担当教員向け事前説明会参加者

	対象者	参加者	3月1日(金)	3月11日（月）	個別対応
シラバス・ポートフォリオ事前説明会	43人	43人	26人	13人	4人
授業手法に関する説明会 （新しくご担当頂く先生、希望者対象）	20人	20人	13人	4人	3人

（3）「自立と体験１」代講件数

実施年度	代講件数（延べ数）
2010年度	23件
2011年度	31件
2012年度	23件
2013年度	15件
2014年度	20件
2015年度	15件
2016年度	12件
2017年度	13件
2018年度	7件
2019年度	14件

（4）「自立と体験１」ランチミーティング参加者人数

実施年度	参加者人数（延べ人数）
2016年度	184名
2017年度	139名
2018年度	154名
2019年度	163名

※2019年度の7月19日(金)は、金曜日1限、2限の授業が休講になったため、ランチミーティングを開催しなかった。

３．SA・SAコーチについて

（1）「自立と体験１」SA人数、説明会参加者数

実施年度	SA人数	SA説明会参加人数（概算）
2010年度	40名	－
2011年度	52名	－
2012年度	51名	－
2013年度	68名	130名
2014年度	83名	140名
2015年度	92名	159名
2016年度	102名	167名
2017年度	94名	352名
2018年度	82名	184名
2019年度	97名	196名

・2013年度より公募（説明会）開始。

（2）「自立と体験１」SAコーチ

実施年度	SAコーチ人数（3年生）	SAコーチ人数（4年生）	合計
2015年度	3名	2名	5名
2016年度	3名	6名	9名
2017年度	3名	3名	6名
2018年度	2名	7名	9名
2019年度	2名	7名	9名

・ＳＡコーチは2015年度より導入。

４．学内協力部署・職員・学生について

（1）「大学職員に取材する」

①「大学職員に取材する」（対応部署2010年度、2011年度は、「大学の施設にふれる」）

実施年度	部署数	協力部署
2010年度	5	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター
2011年度	7	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、明星教育センター
2012年度	12	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、総務課、人事課、広報室、調達センター、連携研究センター、明星教育センター
2013年度 2014年度 2015年度	13	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、総務課、人事課、広報室、調達センター、連携研究センター、通信教育部、明星教育センター
2016年度	14	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調達センター、総務課、学長室広報課、人事課、連携研究センター、地域交流センター、通信教育部、明星教育センター
2017年度	14	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調達センター、総務課、学長室広報課、人事課、連携研究センター、地域交流センター、通信教育部、明星教育センター
2018年度	15	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調達センター、総務課、学長室広報課、人事課、連携研究センター、地域交流センター、通信教育部、アドミッションセンター、明星教育センター
2019年度	15	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調達センター、総務課、学長室広報課、学苑・大学人事部、連携研究センター、地域交流センター、通信教育部、アドミッションセンター、明星教育センター

・上記以外に「図書館にふれる」の回で、図書館職員の方より説明等のご協力をいただいています。

②2019年度「大学職員に取材する」各部署対応人数（延べ人数）

部署名	教務企画課	学生サポートセンター	キャリアセンター	ボランティアセンター	国際教育センター	情報科学研究センター	調達センター	アドミッションセンター
訪問グループ数	35	31	36	25	20	29	25	12
対応者数（延べ人数）	12名	12名	24名	20名	8名	12名	10名	6名

部署名	総務課	学長室広報課	学苑・大学人事部	連携研究センター	地域交流センター	通信教育部	明星教育センター	合計
訪問グループ数	27	8	24	26	16	6	30	350
対応者数（延べ人数）	10名	3名	10名	14名	8名	4名	12名	165名

③2019年度「大学職員に取材する」協力部署への事前説明会参加者数

開催日時	参加者
5月16日（木）13：30-14：30	3名
5月23日（木）13：30-14：30	6名

（2）2019年度 「自立と体験１」ゲストスピーカー

実施年度	人数	学部学科学年
2019年度	2名	・経済学部経済学科３年１名 ・教育学部教育学科３年１名

以上

2020年３月12日・学部長会資料

学長　大橋　有弘　殿

担当副学長　菊地　滋夫
明星教育センター長　西本　剛己

2019年度 全学初年次教育「自立と体験２」実施報告書

Summary（概要）

・2019年度の単位修得率は、89.5%となった。平均出席率は82.5%だった。（本文p.3-4参照）

・学生アンケートを１回授業時と15回授業時に実施した。教育目標達成度では、ほとんどの学生が授業を通して「根拠を持って考え、様々な問いを発見することができる」ようになっていた。また８割以上の学生は「専門性を意識して調べることができる」、「根拠に基づく説得力ある表現ができる。（書く・話す）」、「社会の課題と自らを関連づけて説明できる」についても肯定的な回答だった（本文p.6-7参照）

・授業前アンケートの「この授業を履修した理由」（複数回答）では、「授業内容が面白そうだった」97.0%、「授業内容が将来の役に立つと思った」79.0%、「自立と体験１の授業内容が良かった」78.0%が上位であった。授業後アンケートの「この授業を履修して良かった点」（複数回答）については、「授業内容が面白かった」が95.0%、「グループ活動の授業形態が良かった」82.0%、「授業を通して様々なスキルが身についた」73.0%が上位であった。このことから学生はグループ活動を実際に体験して高く評価したことが分かる（本文p.7-8参照）

・導入期である「1～4回で印象に残っている回の選択」については、第４回のプレゼンテーションの基本が最も高く次いで第１回のオリエンテーション（授業概要の説明及びSDGsについての基礎レクチャーという結果になった。第５回のテーマに関わる専門家をゲストに招聘しての授業に対しては、約90%の学生が「役にたった。やや役にたった」と回答している（本文p.9-10参照）

・導入（1～4回）、PBLパートの前半（グループで未来像を構築し論拠や問いを深める）、PBLパート後半（発表準備及びプレゼンテーション）においての授業の難易度については、それぞれ39.1%、40.9%、50.3%の学生が「難しかった。やや難しかった」と回答していた。このことから、授業は発表に向けて徐々に難しくなると学生に認識されたことがわかった。一方で、第６回から14回のPBLに関しては92.7%の学生が「満足。やや満足」という評価を得ており、難易度の高い授業ではあったが学生にとって満足のいくものであったことがわかる（本文p.9-11参照）。

・次年度に向けて、今年度の授業実施の中で見えてきた具体的な改善点として、(1)「導入」（第１～４回）の内容改訂 、(2) プレゼンテーション大会の見直し、(3) 「未来像」というゴールイメージの明確化の３点について特に改善を進めていきたい（本文p.15参照）。

１．　開講までの経緯

2016年６月、学長の諮問により「『自立と体験２』の全学共通科目への移行を検討する諮問委員会（以下「諮問委員会」という）が設置された。学科科目として運営されている「自立と体験２」を、全学共通科目として全学的なキャリア教育プログラムを提供できる科目として見直し、一層充実した体系的なキャリア教育の実現を目指したものである。従来学科科目として運営されていた「自立と体験２」は、特色ある学科のキャリア科目として名称を改めて運営することを期待された。

諮問委員会は12月に最終答申を学長へ提出し、2017年２月の大学評議会において全学共通科目への移行が承認された。これにより2019年度より「自立と体験２」は全学共通科目として開講されることとなった。諮問委員会の最終答申において教育目標、授業計画・概要が示され、具体的な授業内容の検討は、明星教育センターにて進められた。準備期間を経て、2019年４月より、全学共通科目１年次開講科目の選択科目として2019年度生の履修登録が開始された。なお、2020年度以降は、１年次開講科目であるため、２年生（2019年度生）も履修可能となる。

２．　授業概要

2.1　教育目標

（1）自分たちがこれから生きていく社会の未来像を描くという課題に取り組む
（2）個々の学生が自らの専門性を意識しながら、学部学科を超えたメンバーと交流し学ぶ
（3）社会の課題と自分自身を関連付けさせつつ、大学における学びの基礎となり、日常生活や社会でも求められる汎用技術としての「論理的な思考力と論理的な表現力」を涵養する

2.2　行動目標・到達目標

(1) 根拠を持って考え、様々な問いを発見することができる
(2) 専門性を意識して調べることができる
(3) 根拠に基づく説得力ある表現ができる(書く･話す)
(4) 社会の課題と自らを関連づけて説明できる

2.3　授業内容

2019年度の授業内容は、表１のとおりである。2019年度のテーマは「食の未来」とし、2015年９月の国連サミットで採択された、2030 年までの国際社会全体の開発目標 SDGs（持続可能な開発目標）を手掛かりに、様々な視点から食の未来を考えることを目指した。

授業のルールとして、授業に休まず参加すること、授業内での話し合いには積極的に参加すること、振り返りシートにしっかり取り組み、授業内での学びを記録することの３点を定め、オリエンテーションで学生に周知した。成績評価基準は、①提出課題（レポート２回、毎回の振り返りシート）、②プレゼンテーション大会への参加、③授業参加態度の３点とし、「合」「否」で評価した。

表１　「自立と体験２」の授業内容

回		授業名	授業内容
1	導入	オリエンテーション	「自立と体験２」の学習内容理解、SDGs※理解
2		ロジカルシンキング	論理的な考え方・伝え方を理解する
3		ロジカルライティング	論理的な文章の書き方を理解する
4		プレゼンテーションの基本	プレゼンの基本を身に付ける、チームで活動する
5	PBL※	多様な視点を知る	ゲストスピーカーによる講義を聴く
6		問いを集める	未来像を描くための「Seeds（種）」を見つける
7		専門の視点で情報を集める	専門を活かして未来像を描くための情報を集める

8		情報を基に未来像を描く	SDGs のレンズで未来像を描く
9		問いを深める	新たなデータ(客観的事実：実例・統計・経験等)を集める
10		考えを論理的に構成する	主張を論理的に構成する
11		プレゼンテーションの準備	未来像をポスターにまとめる
12		プレゼンテーションのリハーサル	ポスターを作成する、プレゼンテーションの練習をする
13		プレゼンテーション大会（予選：クラス内）	クラス代表を決定する
14		プレゼンテーション大会(本選:クラス代表)	全クラス合同のプレゼンテーションを行う
15	まとめ	これからのプランニング	学びをこれからの学生生活で継続する

※PBL：Problem-Based Learning

※SDGs：2015 年 9 月の国連サミットで採択された国際社会全体の持続可能な開発目標。2030 年をゴールとする。

2.　実施結果

2.1　開講曜日・時限・設置クラス数等

開講初年度のため、履修者数の想定ができず、当初金曜日 1 限、2 限ともに各 9 クラスの開講を予定した。

4 月以降の学生の履修状況から判断し、金曜日 1 限 2 クラス、金曜 2 限 8 クラスを開講した。ただし履修訂正期間内（2019 年 9 月 9 日～22 日）の第 1 回、第 2 回授業は合同授業とし、金曜 1 限 1 クラス、金曜 2 限 2 クラスで実施、第 3 回授業からそれぞれのクラスに学生を配置しクラス単位での授業を開始した。

2.2　履修者

履修者数は、表 2 のとおりである。

新規開講科目であり、1 年生が入学直後に履修登録をすることから、4 月時点での履修登録者は、175 名にとどまった。そのため「自立と体験 1」の授業内でチラシを配布し履修促進を図ったところ、9 月 17 日現在で 277 名、最終的には 288 名の履修となった。各クラスの学生数は、1 限が各 20 名程度、2 限が 30 名程度となった。

2.3　出席率

2019 年度の平均出席率は、図 1 の通り 82.5%であった。

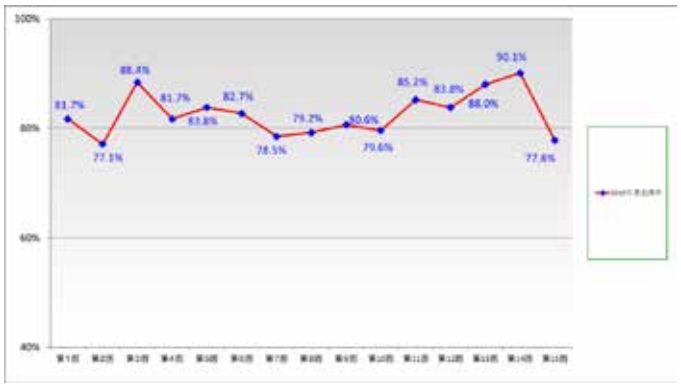


図 1　「自立と体験 2」出席率の推移

最高値は第 14 回プレゼンテーション大会：本選の 90.1%であり、最低値は第 2 回の 77.1%となった。また金曜日 1 限の平均出席率は 77.5%、金曜日 2 限は 83.4%であった。なお、出席率は履修者数 288 名（金 1：44 名、金 2：244 名）から全 15 回欠席者 4 名を除いた 284 名（金 1：42 名、金 2：242 名）で算出した。

表 2「自立と体験 2」履修者数の推移および単位修得者数

学部学科	4 月現在		9/17 現在		終了時		単位修得者	
	計	時限	計	時限	計	時限	計	時限
理工学部総合理工学科物理学系	3	2	6	2	6	2	4	2
		1		4		4		2
理工学部総合理工学科生命科学・化学系	4	0	8	0	9	0	8	0
		4		8		9		8
理工学部総合理工学科機械工学系	13	3	16	4	15	3	13	2
		10		12		12		11
理工学部総合理工学科電気電子工学系	14	0	15	0	14	0	10	0
		14		15		14		10
理工学部総合理工学科建築学系	4	0	2	0	2	0	2	0
		4		2		2		2
理工学部総合理工学科環境科学系	11	0	18	0	17	0	16	0
		11		18		17		16
人文学部国際コミュニケーション学科	2	0	6	0	14	1	13	1
		2		6		13		12
人文学部日本文化学科	0	0	10	3	7	5	7	5
		0		7		2		2
人文学部人間社会学科	8	2	2	0	10	4	10	4
		6		2		6		6
人文学部心理学科	2	0	7	5	1	0	0	0
		2		2		1		0
人文学部福祉実践学科	3	1	7	4	7	4	7	4
		2		3		3		3
経済学部経済学科	34	18	44	11	43	11	41	10
		16		33		32		31
情報学部情報学科	12	0	18	0	23	0	21	0
		12		18		23		21
教育学部教育学科	12	2	24	4	24	4	21	1
		10		20		20		20
経営学部経営学科	28	7	56	8	58	7	51	4
		21		48		51		47
デザイン学部デザイン学科	9	4	12	1	12	1	9	1
		5		11		11		8
心理学部心理学科	16	0	26	2	26	2	25	2
		16		24		24		23
合計	175	39	277	44	288	44	258	36
		136		233		244		222

※時限は、上段が金曜日 1 限、下段が金曜日 2 限の人数。

※履修者 288 名のうち、1 年生が 282 名、2 年生が 5 名、3 年生が 1 名であった。

※単位修得者 222 名のうち、1 年生が 218 名、2 年生が 4 名、3 年生が 0 名であった。

2.4　単位修得率

2019 年度の単位修得者は、履修者 288 名中 258 名で、単位修得率は 89.5%となった。全 15 回欠席者 4 名を除くと、全体は 90.8%、金曜 1 限 81.8%、金曜 2 限は 91.0%である（表 2 参照）。

2.5　授業運営方法、その他

(1)担当教員

授業は、明星教育センター教員 9 名で担当した。金曜 1 限が 2 名、金曜 2 限が 8 名のため、1 名の教員が 2 クラスを担当した。

担当教員向けに共通教案を開発し、事前に共通教案を共有することで、基本的な授業の構造は統一とした。授業の進め方の詳細は、各担当教員に任された。

(2)SA の配置

各クラスに 1 名の SA を配置した。SA は、「自立と体験 1」の SA 体験者等から、明星教育センターが選抜し依頼した。2 年生 1 名、3 年生 6 名、4 年生 3 名の計 10 名となった。

(3) ゲストスピーカー

ゲストスピーカーとしては、学生に多様な視点を提供するという目的から、以下の 2 名に依頼した。

瀬野泰司氏	三菱食品株式会社	品質管理 GM
大西桃子氏	フリーライター ・ 無料塾主宰	

ゲストスピーカーには、プレゼンテーション大会（本選）にも参加いただき、特別審査員として審査を依頼した。

(4) プレゼンテーション大会

第 13 回ではクラス内で、各チーム 5 分間のプレゼンテーションによるクラス予選を実施し、学生、SA、教員の審査によりクラス代表のチームを、金曜 1 限は各クラス 2 チーム、金曜 2 限は各クラス 1 チーム選抜した。

第 14 回では、選抜チームによりプレゼンテーション大会（本選）を実施し、最優秀賞、優秀賞（金曜 2 限のみ）、特別審査員賞（2 チーム）を選考し、表彰した。

(5) 提出課題

提出課題は、以下のとおり提出させた。

第 1 回課題レポート：第 8 回授業出題、第 9 回授業提出

> 課題：授業内および宿題として行った情報収集について、800 字程度で記述すること。その際、「あなたが担当するグループの問いは何か（もしくは、あなたのグループの未来像は何か）」、「どのような手法で情報を集めたのか」、「そこから分かったことは何か」、の 3 点を含むように作成する。

第 2 回課題レポート：第 13 回授業出題、第 14 回授業提出

> 課題：授業でグループで「未来像」を描く取り組みを通じて、あなた個人の職に関する考えはどのように変化しましたか、もしくは食とあなたとの関係についてどのようなことを考えましたか。800～1200 字程度で記述すること。
> その際、文章構成は PREP 法を参考に作成すること。

３．授業評価

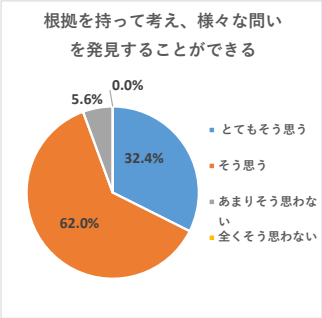
授業改善を目的として、第 15 回授業時に、出席者に対して「自立と体験２」オリジナルのアンケートを明星 LMS 上で実施した。回答者数は 179 名で、履修者全体に対する回答率は 62.2%だった。各設問の回答結果は、図 2－図 17 に示した（集計にあたっては記述なしの無効回答を除いた）。本年度の教育目標の達成や学生の反応について考察する。

3.1　教育目標の達成度について

行動目標・到達目標については、4 つの質問で尋ねている。「根拠を持って考え、様々な問いを発見することができる」に「とてもそう思う」、「そう思う」と肯定的に回答した学生は、94.4%であった（図 2）。自由記述欄では、「根拠を持って考えることは大切」、「論理的な考え方や伝え方が身についた」、「考え方をちゃんと学習するということはなかったので興味深い」、「斬新な思考方法だった」など、学生にとってこの授業が論理的思考力を育み鍛える機会になっていたことが分かる。

「専門性を意識して調べることができる」への肯定的回答は、82.7%であり（図 3）、「根拠に基づく説得力のある表現ができる（書く・話す）」は、86.0%（図 4）、「社会の課題と自らを関連づけて説明ができる」は、83.2%であった（図 5）ことから多くの学生が本授業の行動目標・到達目標を達成できたと考えていることが示された。

一方で「専門性を意識して調べる」と「社会の課題と自らを関連づけて説明できる」については、「あまりそう思わない」と回答した学生が 16.8%であった。専門性を意識した学びや社会的関心を持ち自分事として考え説明できる力の育成については、1 年生後期の段階ということもあり一部課題が残った。



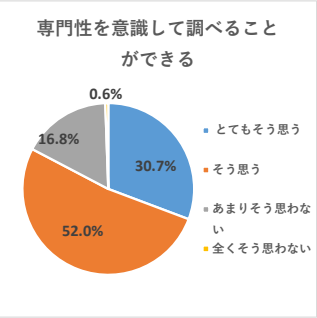


図 2（左）根拠を持って考え、様々な問いを発見することができる
図 3（右）専門性を意識して調べることができる

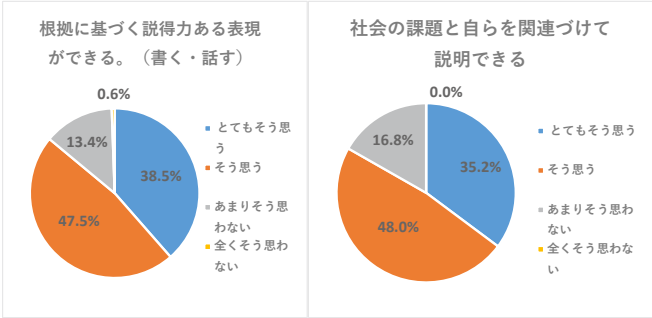


図４（左）根拠に基づく説得力ある表現ができる。（書く・話す）
図５（右）社会の課題と自らを関連づけて説明できる

3.2　学生の反応

受講後アンケート回答者の 95.5%が、「自立と体験２」の授業へ参加して「とても良かった」「割と良かった」と肯定的に回答した(図 6)。自由記述欄には、グループワークを通した学びや他学部他学科との交流が有意義だったとの記述が多くみられた。具体的には、「グループワークを通して、積極的に参加する意義を学べた」「一つの問題に対してみんなで話し合うという重要なスキルを身につけることができた」「他学部との交流ができて考え方や価値観の違う人と話すいい機会になった」「他学部と交流して色々な意見を取り入れることができた」等の記述があった。

この授業を履修した理由（複数回答）の上位３位の回答は、「授業内容が面白そうだった」97.0%、「授業内容が将来の役に立つと思った」79.0%、「自立と体験１の授業内容が良かった」78.0%であった(図 7)。この授業を履修して良かった点（複数回答）の上位３位の回答は、「授業内容が面白かった」が 95.0%、「グループ活動の授業形態が良かった」82.0%、「授業を通して様々なスキルが身についた」が 73.0%であった(図 8)。履修前と履修後の学生の反応を比較すると、授業内容の面白さについてはほぼ数値が変わらない結果となり、多くの学生にとってこの授業が期待通りの内容であったことがうかがえる。

履修前と履修後の学生の反応に差が見られたのが、グループ活動の授業形態である。履修理由が 45.0%に対し、履修後に良かったと回答したのが 82.0%と 37 ポイント上昇し、実際に体験したことでグループ活動の意義をより深く実感できたと考えられる。一方で、授業内容が将来に役立つかについては、履修理由 79.0%から履修後に良かったと回答したのが 52.0%と 27 ポイント減少していた。このことから、授業を通して目前に必要なスキルは身についたが、将来の役に立つと感じられなかった学生も存在したことが分かった。

取り組み状況については、「あなたはこの授業にどのように取り組みましたか」において「非常に積極的に取り組めた」「積極的に取り組めた」を合わせると 78.8%であった(図 9)。自由記述欄には、「発表するための事前準備などしっかり取り組めたことで積極的に発言し、意見交換できた」「それぞれが持っている個性みたいなものをまとめることができ、円滑にグループワークをすることができた」「クラス代表には選ばれなかったがレベルが高いものを作れたと思うから」等の記述があった。

また、「この授業を後輩にも推薦しますか」に対する「多いに勧めたい」「勧めたい」の合計が 96.1%であった(図 10)。その理由として自由記述欄には、「色々なテーマから学部と関連した学びもできるし、他学部との交流をして様々な視点から学ぶことができる」「考えを深めたり、論理的思考力を身につけ、その理由を考えられるようになるから」「発表のスキルや情報収集の技術をあげるために良いと思うから」「一つの課題に対してグループで考え、取り組むというのは今後の大学生活において役立つと思うため」「この授業は将来の目標がない人や人間関係を広げたい人にとても良い授業だと思うから」等の指摘があり、学生の受講後の評価は高いものとなった。

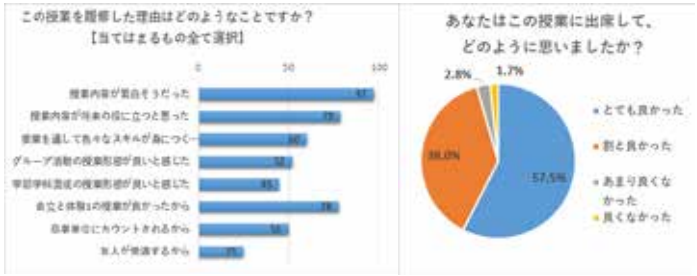


図６（左）　授業の満足度
図７（右）　授業を履修した理由

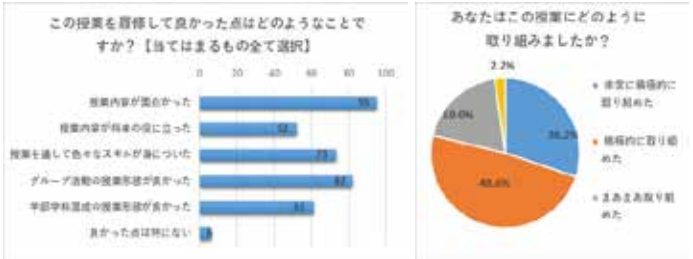


図８ 授業を履修して良かった点
図９ 授業への取り組み姿勢

図 10 授業を後輩にも推薦したいか

3.3 授業内容に関する学生の感想

学生が授業内容を各セクション別（導入、ゲスト講義、PBL 前半、後半）にどの程度の満足度や授業に対する難易度を感じていたかをアンケート結果からまとめる。

導入期である「1～4 回で印象に残っている回の選択」については、第４回のプレゼンテーションの基本が最も高く次いで第１回のオリエンテーション（授業概要の説明及び SDGs についての基礎レクチャー）そして、第２回のロジカルシンキングの順となっている（図 11）。なお、第１回、２回はそれぞれ時限毎にクラス合同で実施した。

自由記述欄でのコメントを抜粋すると「どのような授業なのか判らなかった点がはっきりした」「毎回違う学部の学生とのセッションが新鮮であった」「論理的に考える事の重要性を知った」「ゲーム感覚で参加できた」「PREP 法が発表に適しているのを身をもって体験できた」「プレゼンテーションは今後色んなシーンで必ず使うので、役立った」「プレゼンテーションの仕方を判り易く説明してもらえた」等の記述があった。

一方で、この 1～4 回においての授業の難易度については、約半分 49.7%の学生が「丁度良い」と答えた半面、新しい考え方や深く、広く思考の展開を求めた結果か 39.1%の学生が、「難しかった。やや難しかった」と回答している（図 12）。自由記述欄でのコメントでは、「全くわからない内容でもないけれど調べれば調べるほど新しいことが学べた」や「先生が自分たちの能力に合わせて授業してくれたから」などのコメントがあった反面、「大学生にはこのテーマや内容は難しい」「答えのない問題を考えたり、今までやってこなかったことだから難しい」などのコメントも散見された。

第 5 回のテーマに関わる専門家をゲストに招聘しての授業に対しては、約 90%の学生が「役にたった。やや役にたった」と回答している（図 13）。この回に関する自由記述欄には「普段聞けない話がきけた」「最前線に立つ人から現状の把握に関する情報を入手できたから」「食品ロスを身近な事で考えられたから」「世界規模での飢餓や貧困・企業の現状取組み取り組み・子供食堂など違った視点での情報を得られた」「今後のグループワークを進める切り口になった」等の記述があった。また少数ではあるが、「グループの考えたテーマ（仮説）と違った」「企業側の発言に疑問点が生じた」などクリティカルなコメントもあった。

第 6 回から 14 回の PBL のためのグループ活動及び成果発表ついても、92.7%の学生が「満足。やや満足」という評価を得ている（図 14）。その理由として自由記述欄には、「グループのメンバーと協力しながら学習することが出来たから」「大会を目標にみんなで何かに取り組むのはとても楽しかった」「意見を話し合い、一つの未来像を描く過程は、色んなアイデア生まれ楽しかった」「私の苦手そのものであるグループワークに参加できたから」「他の班がどうやって発表資料を作っているかや、発表の仕方を学ぶことが出来たので良かった」等の非常に前向きなコメントが多かった。また一部ではあるが「欠席者いると流れが断絶する」等の意見もあった。

この PBL パートの前半（グループで未来像を構築し論拠や問いを深める）での難易度については、約半数（48.6%）の学生が「ちょうどよい」と回答している一方で、４割（40.9%）の学生が「難しかった。やや難しかった」と回答している（図 15）。自由記入欄には「考える力を身につけるのに丁度よかったから」「基礎的な部分であったため難しく感じなかった」というコメントの一方で、「自分の意見を相手に的確に伝える事がとても難しかった」「どのテーマについて調べるのか決めるのが少々難しかった」「一度決めた未来像を変えたり紆余曲折があったから」などの意見もあった。

また PBL パート後半 11～14 回の発表準備及びプレゼンテーションでの難易度については 43.6%の学生が「ちょうどよい」と回答していたが、50.3%の学生が「難しかった。やや難しかった」と回答している（図 16）。自由記述欄で「時間調整が出来ずうまく発表が出来なかった」「専門的な知識、情報を短期間で収集し処理するのがとても難しく感じた」「根拠や裏付けにたどりつくのが難しく苦戦した」などの意見があった。

またその成果物（ポスター）や発表（プレゼンテーション）についておよそ半数の 50.8%の学生が「やや満足」そして「満足した」との回答が 31.3%に達しており「満足していない・あまり満足していない」は、わずか 17.4%にとどまった（図 17）。

自由記入欄には「妥協点はいくつかあるが、最終的には納得がいくものを楽しく作れた」「ポスターはとても見やすくできた。発表時間が短かったが、内容を伝えることが出来た」と肯定的にとらえたコメントもあるが、一方で「下書きはしたものの最後まで構図がはっきりしなかったためイマイチのものになってしまった」「あまりインパクトがあるものにならなかった」「漢字の間違いがあった。もっと点検するべき」「カンペをずっと見ていることが心残り」等まだまだ改善すべき点を振り返っているコメントも多かった。

全体を通じての感想では、大別して二つの点での感想が多く寄せられていた。一つはグループワークを中心に進め方について各種の感想で「他学部の人たちとの交流や他の人の意見から新しいアイデアを出すなどとても実りある時間だった」「他の学部の人との交流で自分にはない発想があって面白かった」「他学部の人たちと一定期間同じ班で活動することでとても刺激になるし考えが広がった」「メンバーとのコミュニケーションを取ることやグループワークは今後も必須なのでためになった」「発表にはいくつか心残りがあるが、ここでうまくできなかったことを活かしてみたい。」などの学部を越えた交流、グループワークの意見が多く寄せられていた。

またもう一つは、取り組みテーマについての感想で「食の未来という未知の領域を考えることが出来たのでとても有意義だった」「SDGs に興味を持つことが出来た」「色々知れてニュースを見る目も変わり楽しかった」等ポジティブな感想が多かった。

学生から寄せられた「この授業で改善してほしい点」については、「ポスター形式でなく、Power Point だと相手に伝わりやすく、話す内容も伝えやすくなると思った」「先生の評価を聞きたい。『選ばれなかったけれどみんな良い』は成長に繋がらないと思う」「グループ編成についてもう少し工夫してほしい」等の意見があった。

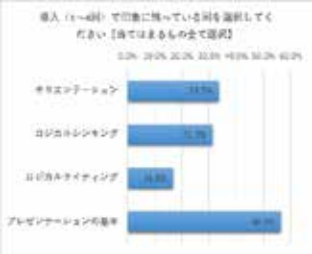


図 11（左） 導入（1～4 回）で印象に残っている回
図 12（右） ゲスト講義の感想

図 13 PBL の満足度　　図 14（右） 導入の難易度

図 15 PBL 前半の難易度

図 16 PBL 後半の難易度

図 17 発表の満足度

3.4　教員からみた評価

担当教員からは導入・PBL・プレゼンと振り返りという 3 つのフェーズに関して、それぞれ以下の指摘があった。

(1) 第 1 回から第 4 回（導入）

授業内容に関しては、PBL に入る前の導入部について複数名の教員から 1 回分の授業を短縮して構成しなおす案が提示された。具体的には図解トレーニングの教材を用いていたロジカルライティングの回を再考するなどの内容が挙げられた。また、導入部を再構成するにあたり、問いの練習も含めてゲストの話を聞く授業回の前に「食の未来」というテーマに関して学生たち自身が自由に問いを立てる機会を持つことを提案した教員もいた。

一方、授業運営に関しては、グループ分けをするタイミングの難しさを指摘する声もあった。具体的には少なくとも初めの 4 回くらいの授業の様子をみて決める、グループワークをしている様子をみてから決めるなどの案が提示された。

(2) 第 5 回から第 10 回（PBL）

PBL に関する授業内容については以下のような指摘があった。まず、ゲストスピーカーの話を聞く会に関して、ゲストに企業人とフリーランスの方と多様な属性の方にきていただいたことを評価する意見があった。次に、ゲストの話をもとに問いを集める回で用いた「基本的な問い方」に関する資料が有効であったとの意見があった。一方、「問い」という言葉は第 6 回（探索的な内容）と第 9 回（根拠につながる内容）で異なっていたので、混乱がみられたという指摘があった。

また、未来像というテーマに関しては多方面から意見が挙がった。まず、未来像という言葉の示す時空間等を広く設定していたために、学生に対する指示が難しいと感じる場面があったという教員もいた。また、ゲストの話や情報収集から得た限られた内容に囚われて、「見たこともない発想が出る」という学生の良さ、可能性が発揮しきれなかったと感じた教員もいた。これらの内容に関する授業運営に関して、教員によっては「ロジックが通ってないことを度々指摘する」「問いのパターンを示す」「未来像のサイズ感を示す」などの介入をしていたという意見があった。

(3) 第 11 回から第 15 回（プレゼンと振り返り）

プレゼンテーション大会に関しては、限られた時間の中でも学生たちは着実に準備を重ね、教員が想定していた以上の発表が見られたことや、初めての試みだったのにも関わらず運営面でも滞りなく行われたことを評価する教員が多かった。また、プレゼンテーション大会の感想が充実していたという指摘もあった。その理由として、学生たちは各々十分に準備したうえで他のグループの発表に耳を傾けたので、他人事ではなく自分の課題として聞いていたとの考察があった。一方、プレゼンテーションの形式に関しては、ポスター形式や点数で評価するか否かについて、様々な意見が挙げられた。また、プレゼンテーション当日の内容だけではなく、それまでのプロセスを評価したいという意見もあった。一方、振り返りに関しては、最終回だけではなく、途中の段階でおこなう案も提示された。

また授業全体を通して、「食の未来」を多面的に考察することを通じ、受講生は知識・考え方・行動などにおいて新たな自分を見出したという評価があった。それは、自分たちが社会の一員であること、社会にかかわりうる存在であることなどに気づき、今まで以上に社会を意識するようになったことのあらわれであり、その意味では、「社会の課題と出会う」という「自立と体験２」の副題の目的は達成されたのではないかと考えられる。

４．次年度に向けて

「自立と体験２」は 2019 年度が初年度の開講となったが、到達目標の学生評価も概ね良く、授業運営に大きなトラブルがなかった点で、順調なスタートが切れたといえる。また PBL 活動は半数程度の学生にとって難しいものであった一方で、ほとんどの学生が肯定的評価をしており、難易度の高い授業ではあったが学生にとって満足のいくものであったことがわかる。教材や教案に授業実施をしながら得られた細かな修正ポイントは様々あるが、来年度に向けて大きな改善が必要な点としては以下の３点がある。

(1)「導入」（第１～４回）の内容改訂

教員振り返りにおいて、第５回のゲスト講義の前に学生が一度「食の未来」について自由に問いを立てる時間を設けることが、学生の自由な発想を広げることに繋がるという指摘があった。またロジカルライティングの回がその後の授業回にあまり生かせていないという指摘もあったため、「ロジカルライティング」の内容を、問いの立て方を学び、食の未来に対する自由な問いを立てる「問いの立て方」という回に変更することを検討している。

(2) プレゼンテーション大会の見直し

授業日程の関係上、今年度のプレゼンテーション大会は 12 月の最終授業にクラス内予選（13 回）、1 月に本選（14 回）と予選から本選まで 1 ヶ月近く期間が空いてしまうことになった。この結果、本選出場グループ間での学生の準備状況に偏りがみられることとなった。2020 年度のスケジュールでも同様の問題が起こることが想定される。このため、2020 年度は試験的にプレゼンテーション大会を 1 回で実施する方法を実施する予定である。詳しい実施方法に関しては、来年度早々に決定する予定であるが、全クラス合同でのポスターセッションや、クラスミックスによるプレゼンテーションなどの案が検討されている。また学生や教員から意見のあった、プレゼンテーションメディアや評価方法に関する検討も必要になる。

(3)「未来像」というゴールイメージの明確化

今年度の授業では、「食の未来」をテーマに掲げたが、担当教員によって「未来像」という言葉のイメージが異なってしまうという問題がみられた。このため発表会での審査が難しかった、レベル感が揃わなかった

という意見が教員振り返りでみられた。2020 年度の授業実施にあたっては、未来像がいつの未来なのか、誰のための未来像なのかなどを明確にすることを検討している。

以上

報告書作成：明星教育センター
石野由香里・太田昌宏・落合一泰・菅原良・鈴木浩子・高橋南海子・平塚大輔・福山佑樹・南愛

2020年3月12日・学部長会資料

学長　大橋　有弘　殿

担当副学長　菊地　滋夫
明星教育センター長　西本　剛己

2019年度 全学キャリア形成科目「自立と体験３」授業実施報告

≪Summary≫

- 2019年度は、社会人基礎力をテーマとした授業（第２回）を新たに設置した。また、演習の進め方と内容、教材（第3～14回）に一部改訂を加えて実施した。改訂した点については、担当教員および受講学生より概ね支持を得られた。
- 最終的な履修者は182名（2018年度：147名）（全欠席者9名を除く）。平均出席率は73.3%（2018年度：74.0%）、単位修得率は76.9%（2018年度：91.2%）、単位取得者数は140名（2018年度：133名）であった。
- 終了時アンケートによると、多くの学生が行動目標・到達目標を達成したと考え、授業を通した能力の伸長及び意識の変化を自覚し、99%が授業に満足していた。
  次年度への課題としては、(1) 授業内容のブラッシュアップ、(2) 担当教員の裁量の幅を広げる、(3) 体系的キャリア形成科目群における「自立と体験3」（2020年度より「自立と体験3A」に科目名が変更）の位置付けに関する再検討、(4) 明星LMSの積極的な活用が挙げられた。

1 .授業概要

1.1　教育目標

チームで様々な課題や演習に取り組むことを通して、

（1）論理的に考え表現することを学ぶ。
（2）問題を発見し解決することを学ぶ。
（3）大学生活でも役に立つ「社会人基礎力」を伸ばす。
（4）自己を知り将来のキャリアを考えるきっかけとする。

1.2　行動目標・到達目標

（1）自ら考えて行動し、主体的に学ぶ。
（2）問題や問題意識の持ち方を理解し、問題解決の考え方を身に付ける。
（3）社会に対する関心を高める。
（4）自分の課題に向き合い、キャリアをデザインする。

1.3　授業内容

2019年度は、2018年度「自立と体験３」の課題を受けて、シラバス・教育内容に一部改訂を加えた。また、演習内容・教材においても一部改訂を行った。

また、前年度からの課題である「明星大学独自のキャリア教育の確立に近づけていく」ことに加え、「より社会人基礎力（明星大学バージョン）を意識したプログラム」で開講することを目指した（授業内容：資料２）。

主な改訂ポイントは以下のとおりである。

（1）授業内容と社会人基礎力育成との繋がりをより意識した授業プログラムの検討
第2回に「社会人基礎力を知る」をテーマとする授業を新設し、教育目標である社会人基礎力を伸ばすことを、授業全体を通じて深化・定着していくことができるようにプログラムの再構成を行った。

（2）「社会の問題」について問題解決のプロセスに時間をかけて取り組める時間配分
2018年度は3回構成（第7～9回）だった「社会の問題」を4回構成（第8～11回）とし、問題解決のプロセスに、2018年度よりも時間を掛けて取り組めるように授業構成を変更した。

（3）「自分の問題」に関する副次的な問題の対処方法の検討
「自分の問題」が深く議論されたことによって現れた副次的な問題（例えば、他の学生に知らせてしまっても良い問題なのか、といった極めて個人的な問題など）について、担当教員が開示しすぎないように適宜介入することを申し合わせた。

（4）明星LMSの積極的な活用
レポート提出などに、明星LMSを積極的に活用することを推奨した。

2 .実施結果

2.1　設置クラス数

２年生後期科目として9クラスを開講した。授業は明星教育センターの8名の教員が担当し、月曜3限・木曜3限は複数クラスを設置した（表1）。

表１　開講曜日・時限・履修登録数

曜日	時限	履修登録数（内全欠席数）
月	2	22（3）
月	3	33（0）
月	3	35（0）
火	1	10（1）
水	5	12（0）
木	3	14（2）
木	3	17（0）
木	3	16（2）
金	3	23（1）
合　計		182（9）

2.2　履修者数及び単位修得状況

開講に先立ち、希望があった学科に対して履修ガイダンスで授業内容の説明を行った。

前期履修登録時の履修者数は273名、最終的な履修者数は173名（全欠席者9名を除く）であった。最終的な履修者は、2018年度（147名）より26名増加した。進級・卒業要件に含まれる学科の履修者数は、デザイン学科（26名）、国際コミュニケーション学科（31名）、経済学科（63名）、心理学部心理学科（10名）であった。自由科目として履修した学生は52名であった（表1）。

表１　2019年度学科別履修者数及び単位修得状況（全欠席者を除く）

学部学科名	履修者数	単位取得者数	単位修得率
理工学部　総合理工学科	26	14	53.8(%)
人文学部　国際コミュニケーション学科※	31	28	90.3
人文学部　日本文化学科	6	4	66.7
人文学部　人間社会学科	-	-	-
人文学部　福祉実践学科	3	2	66.7
経済学部　経済学科※	63	57	90.5
情報学部　情報学科	7	4	57.1
教育学部　教育学科	5	3	60.0
経営学部　経営学科	5	2	40.0
デザイン学部　デザイン学科※	26	16	61.5
心理学部　心理学科※	10	10	100.0
総　計	182	140	76.9

※ 進級・卒業要件に含まれる学科

2.3　出席率

平均出席率は73.3%、最高は81.5%（第１回）、最低は58.4%（第15回）となった（全欠席者を除く）（図1）。

図１　2019年度　出席率

注）第15回は台風の影響で月曜日が休講になったため、当該曜日は補講の出席率で代替した。

3 .授業評価

3.1　教育目標の達成

「行動目標・到達目標」に関し、終了時の授業アンケート（資料１）において達成度を尋ねた。Q6「自ら考えて行動し、主体的に行動することができた」（79%）、Q7「問題や問題意識の持ち方を理解し、問題解決技法を身につけた」（79%）、Q8「社会に関する関心を高めることができた」（78%）、Q9「自分の思い、考えなどを適切に表現することができた」（79%）のいずれにおいても、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせた肯定的な回答が高い割合を

示しており、多くの学生が本授業の行動目標・到達目標を達成できたと考えていることが示された（ただし、いずれの質問項目でも未回答が17%ある）。

3.2　能力の伸長及び意識の変化

「獲得した能力や意識」について、授業で扱ったどの内容が大学生活や将来の役に立つかを尋ねた（Q11）。その結果、「問題解決演習（社会の問題）」（第8～11回）が52%、「自分の問題に向き合う」（第12～14回）が50%、「問題解決の方法」（第5～7回）が39%の評価が高かった。一方、「表現技法（論理的に考え表現する）」（第4回）が22%、「キャリアデザイン」（第15回）が22%となり、高い評価とはならなかった（未回答19%）。

3.3　学生の反応

授業に対する満足度について、終了時の授業アンケートにおいて４件法で尋ねた。Q1「あなたはこの授業に出席してどのように思いましたか」に対して「良かった」、「やや良かった」を合わせた回答が99%（2018年度：99%）であった。

その理由として、「自分について学べた」、「自分の弱点をものにできた」、「自分を見つめ直す良い機会になった」、「就職に対して考えることと、グループワークの練習が出来た」、「コミュニケーション能力が身に付いた」、「普段は勉強しない社会人基礎力を学べた」、「手に入れたものの多さが計り知れない」、「問題解決のスキルを学べ、将来進路を決める際に役立つと思った」、「物ごとについて考える時の視点として、明確に自分の中にはなかったものを発見した」、「自分の問題について考える機会が出来たことや苦手なことを、授業を通して体験できた」、「他学部の学生と交流できたのと、グループワークを通してコミュニケーションスキルが身についた」、「様々な問題を解決するうえで今までの自分では考えられなかったことがこの授業を取って考えられるようになった」、「自分が成長出来たと感じられた」、「いろいろな価値観の人と話したり、考えることができて良かった」、「他の授業ではあまりない内容だったのと知らない人達と話す機会があり自分の成長につながると思った」参加すれば何かしら得られる」という回答があった（授業終了時アンケートより）。

Q3「あなたはこの授業を後輩にも勧めますか」に対する「大いに勧めたい」、「勧めたい」の合計が95%（2018年度：99%）であり、学生の受講後の授業評価は高いことが示された。

その理由として自由記述より、「自分に自信がなかったりした時に勧めたい」、「考える力が身に付く」、「自分の意見が言えるようになる」、「違う学部の人とも知り合え、コミュニケーション能力が高くなる」「自分が苦手な部分をどうやって克服するかを考えることが出来る」、「『考えること』のきっかけになる」、「社会人基礎力を高められる」、「グループワークや発表が頻繁にあるので苦手な後輩がいたら勧めたい」という回答があった（授業終了時アンケートより）。

取り組み状況については、Q4「あなたはこの授業にどのように取り組みましたか」において、「非常に積極的に取り組めた」が25%（2018年度：30%）、「積極的に取り組めた」が54%（2018年度：56%）、「まあまあ取り組めた」が19%（2018年度：14%）、「（出席したが）あまり積極的に取り組めなかった」は1%（2018年度：0%）となった。

3.4　教員から見た評価

担当教員からは以下の指摘があった。

（１）2018年度からの改善点について

- 第２回に社会人基礎力をテーマとする授業を取り入れたこと、第5～7回（問題解決の方法）、第8～11回（問題解決演習）、第12～14回（自分の問題に向き合う）の時間数、教材、進め方を大幅に改訂したこと、ワークブックの内容を改訂したことについては、「社会の問題のグループワークが自信になっていたようだ」、「授業アンケートによると、学生の満足度は割合高かった」という意見が示され、概ね肯定的であった。
- 「（教案通りに）ほぼ予定通りに進んでいた」という意見の一方で、特に履修者数が

多いクラス、履修者の参加意欲にバラツキがあるクラスでは、教案通りに進めることができず「次回に持ち越した」という感想が示された。第 8～11 回（問題解決演習）については、「授業はすべて予定通りに進んでいる」「ほぼ教案通りに進行できた」という感想があり、2018 年度に示された「教材や進め方について改善が不十分」、「学生が消化不良」という課題は解消されたように思われる。

（2）その他の授業に関する事項

- 第 2 回に社会人基礎力をテーマとする授業を取り入れたことにより、授業全体として社会人基礎力を学ぶことを意識させることができた。
- 少人数ということもあり、アイスブレイクを丁寧に行うようにしています。
- 「社会の問題を考える」に入る前の段階でニュース等の関心事を話す時間を多く設けたり、社会的な問題を様々な立場から考えるなどのワークを挟んだ。
- クラス人数が 28 名程度のため、興味のある領域を選んでグループ分けをする際に、ポストイットの色分け等を工夫しました。
- PREP 法の練習問題を 3 回連続でやらせる回は、学生が辛そうだった。3 回程度繰り返さないと定着しないという意図はよくわかる一方で、学生は必要性を実感してわけではない中で練習問題を淡々とやらされている感が否めなく、モチベーションが下がっているようにも思った。
- 授業で扱う内容が学生にうまく伝わっていないのか、学生のニーズに合っていないのか、調査が必要かもしれません。
- 「自分事として」モチベートされる仕掛けがあるといいかと思う。
- 特に個人の問題や、今後の計画については、短い時間でも全員に個別介入することで深まった。

（3）学生の状況

- 全体に理解度が高い学生が多く、教員の説明に付いてきてプロセスをまとめることができていた。
- 概ね出席状況も良く、グループワークにおいても各人が積極的に取り組んでいた。
- 熱心に取り組んで、問題解決スキルを活用するという意識が持てていた様子だった。
- 相手のプレゼンをしっかり聴く姿勢ができていた。
- 多くの学生が現在困っている自分自身の問題に向き合うきっかけになっていた。
- 個人の問題では、問題解決のモデルを活用して、自分の問題を掘り下げることができていた。
- 多くの学生が 13 回と 14 回の間で何等かの解決策を試行し、その検証を発表に盛り込むことができていた。

4 .次年度に向けての課題

（1） 授業内容のブラッシュアップ
授業担当教員アンケート、振り返り、履修学生アンケート等を踏まえ、授業内容のブラッシュアップを行う。

（2） 担当教員の裁量の幅を広げる
2021 年度に予定されている大幅な授業内容の変更を念頭に、2020 年度は共通シラバスのもとで担当教員の裁量の幅を広げ、各教員が試行的に授業を実施することにより、より充実した授業内容を目指す。

（3） 体系的キャリア形成科目群における「自立と体験 3」(2020 年度より「自立と体験 3A」に変更）の位置付けに関する再検討
2021 年度科目「自立と体験 3 B」との関係を踏まえ、体系的キャリア形成科目群にお

ける両者の位置付けの再検討を行う。

（4） 明星 LMS の積極的な活用
レポート課題等の提出に明星 LMS を積極的に活用する。

以　上

資料１　授業終了時アンケートの集計結果（N=108）　※Q2,3,11 は複数回答可

資料２　2019 年度　自立と体験３　授業内容一覧

回	授業名	授業のねらい	主な授業内容
1	オリエンテーション （授業全体の概要・取り組み方）	・「自立と体験３」に興味を持つ ・授業への取り組み方を理解する	Ⅰ. 授業のねらいと内容の紹介 Ⅱ. 大学生活を振り返る Ⅲ. 自立と体験3の特徴を知る Ⅳ. 振り返り
2	社会人基礎力を知る	・社会人基礎力の考え方を知る ・社会人基礎力を確認する	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 社会人基礎力の考え方を知る Ⅲ. 社会人基礎力を確認する Ⅳ. 振り返り
3	チーム活動の進め方 （チームで話し合い発表する）	・チームで協力して活動する体験をする ・チームで話し合い発表をまとめるポイントを理解する ・チーム活動に必要なポイントを理解する	Ⅰ. ウォーミングアップと目標設定 Ⅱ. ディスカッションと発表演習 Ⅲ. チーム活動の振り返り Ⅳ. 振り返り
4	表現技法 （論理的に考え表現する）	・自分の意見を論理的に述べる ・相手の意見を整理して聴く ・他者の意見を聞いて意見を述べる	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 論理的に話す Ⅲ. 意見を述べる Ⅳ. 振り返り
5	問題解決の方法1 （情報を集める）	・問題解決について理解する ・情報収集について理解する ・情報収集の方法を学ぶ	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 問題とは／問題解決とは Ⅲ. 情報収集の入り口 Ⅳ. 情報収集のポイント Ⅴ. 情報収集の方法を学ぶ Ⅵ. 振り返り
6	問題解決の方法2 （情報を整理する_基礎）	・情報を整理・分析する手法（フレームワーク）を学ぶ ・学んだ手法を用いて実際に情報を整理してみる	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 情報を整理する Ⅲ. フレームワークを活用する Ⅳ. 振り返り
7	問題解決の方法3 （情報を整理する_応用）	・問題解決のプロセスを体験する ・問題解決の「見える化」を試みる ・問題解決の手法を使ってみる	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 前回の授業の振り返り Ⅲ. 問題解決の方法を学ぶ Ⅳ. 個人目標の設定 Ⅴ. 振り返り
8	問題解決演習1 （社会の問題を見つける）	・資料をきっかけに問題を発見する。	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 授業の進め方の理解 Ⅲ. 問題意識を持つ Ⅳ. 振り返り
9	問題解決演習2 （社会の問題の課題を探る）	・情報収集・分析して、課題を提起する	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 情報収集 Ⅲ. 情報分析 Ⅳ. 振り返り
10	問題解決演習3 （社会の問題の解決策を考える）	・提起した課題に対して解決策を考える	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 問題発見・課題設定 （Ⅲ. 拡散思考と収束思考） Ⅳ. 解決策の構想 Ⅴ. レポート作成の説明 Ⅵ. 振り返り
11	問題解決演習4 （プレゼンテーションの実践と振り返り）	・社会の問題についてﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝする ・相互にフィードバックを行う ・社会の問題解決の取り組みについて振り返る	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. プレゼンテーションの準備 Ⅲ. プレゼンテーション Ⅳ. 振り返り

12	自分の問題に向き合う1 （自分の課題をみつける）	・自分や自身の身近な社会から問題を 発見し、課題を設定する	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 第 12 回～第 14 回までの進め方について Ⅲ. 自分自身の身近な問題について考える Ⅳ. 情報収集・情報分析／問題発見 Ⅴ. 振り返り
13	自分の問題に向き合う2 （自分の課題の解決策を考える）	・設定した課題に対して、解決策を考える	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. 先週の振り返り Ⅲ. 課題の設定　Ⅳ. 解決策の構想 Ⅴ. 次回プレゼンの説明 Ⅵ. 振り返り
14	自分の問題に向き合う3 （プレゼンテーションの実践と振り返り）	・自分の問題についてﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝする ・相互にフィードバックを行う ・個人の問題解決の取り組みについて 振り返る	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ.解決策の振り返り（実行・検証） Ⅲ. 個人プレゼンテーションの進め方 Ⅳ. 個人プレゼンテーションの実施 Ⅴ. 振り返り
15	キャリアデザイン （今後の行動を考える）	・自分の持ち味を知る ・社会人基礎力のいかし方を考える ・今後の行動計画をたてる	Ⅰ. ウォーミングアップ Ⅱ. チームの中での自分を振り返る Ⅲ.「自立と体験３」全体の振り返り Ⅳ. 体系的キャリア教育プログラムの紹介 Ⅴ. 今後の行動計画を立てる Ⅵ. アンケート記入

以　上

2019 年 9 月 19 日

明星教育センター

2019 年度 全学共通キャリア形成科目「自立と体験４」実施報告書

Summary（概要）

・本年度は 8 クラスで開講し、履修者は 120 名と昨年度の 144 名と比べ 17%減少した。

・単位修得率は 94.9%(昨年 96.6%)であり、平均出席率は 78.9%(昨年 77.5%)であった。本年度はジョブインタビューを後ろ倒しにしたことにより最後まで安定した出席率で推移した。

・受講者アンケートでは「授業への取り組み」に対して「非常に積極的に取り組めた、積極的に取り組めた」と肯定的回答は 87%（昨年 80%）であった。また「この授業に出席して就職活動に対する意識が高まったか」の質問についての肯定的回答が 98%であり、「大いに高まった」が 58%（昨年 50%）であった。

・キャリア意識、仕事・職業意識の変化については、自分の生き方や社会に出て働き貢献できるイメージや働くことの楽しさについて考えられない学生もみられたが、多くの学生が授業をきっかけに考えを深めることができていた。また、今年の学生の傾向として受講のきっかけに「就職活動への不安」をあげる学生が多いことや「自分にあった職業を探したい」との回答が増えたことから、長期的な視点で将来や働くことについて考えるよりも目前の就職活動という短期的な視点でこの授業を捉え受講していたことがうかがえた。

・教員からは、ここ数年同様学生はジョブインタビューにしっかり取り組むことができていたとの意見が多く聞かれた。また、各教員が個別フォローや工夫をしながら全体の授業運営を円滑に進めていた。

・一方で本年度から取り入れたセルフリーダーシップの発揮については、教員によっては十分に学生に意識させ、浸透させるところまではいかなかった。また、文章力向上については、授業の中だけで取り組むのは限界があるため、今後添削実施の目的や位置づけを再検討する必要がある。

・次々年度は、社会的・職業的自立促進科目「自立と体験４」からキャリア形成科目「自立と体験 3B」へ変更となる。それを踏まえ、次年度の課題は以下の 3 点である。

① 体系的キャリア教育としての「自立と体験 3B」授業プログラムを再構築する
② 授業目的や授業内容を分かりやすく整理する
③ 自律的に進路を考え、自ら進める態度・思考・行動の育成を図る

1．授業概要

1.1 教育目標

（1）自己実現を目指し、職業を持つ社会人として自立できる能力と意欲を育てること。
（2）生涯を通じての継続的な学習意欲と就業力を育てること。
（3）キャリア教育の最終段階として、具体的に自らの将来像、仕事、就職について考える力と意欲を身につけること。

1.2 行動目標・到達目標

（1）自らの課題を設定し、主体的に学ぶこと。
（2）就職活動の前提となる意識とスキルを身につけること。
（3）社会人の考え方に触れ、働くイメージや就業観を身につけること。
（4）グループでの話し合いを通じて、自己を見つめ自己表現力を鍛えること。
（5）社会人スタートに向け、自ら方向性を見出し具体的な行動への意思が高まること。

1.3 授業内容

本年度は昨年度の課題をうけて行動目標・到達目標に(5) 社会人スタートに向け、自ら方向性を見出し具体的な行動への意思が高まることを新設した。それに伴い授業内容を変更した点は以下の通りである（詳細は【資料 1】を参照）。

(1)「働くことのやりがい」や「働くことの必要性」について考えさせるため、授業内容に以下の演習を組み込んだ。
・現状自分自身の WILL・CAN・MUST について考える演習
・労働市場の変化や働く環境について調べ、職業選択に必要なことや求められる能力について考える演習
・インターンシップに行く目的等について考える演習
(2) 例年通り社会人基礎力を毎回チェックさせるのに加え、本年度から「セルフリーダーシップ」の発揮を意識させた。
(3) 自己と働く場を考えた後にジョブインタビュー実施の流れとするため、授業回を昨年度より後ろ倒しにした。

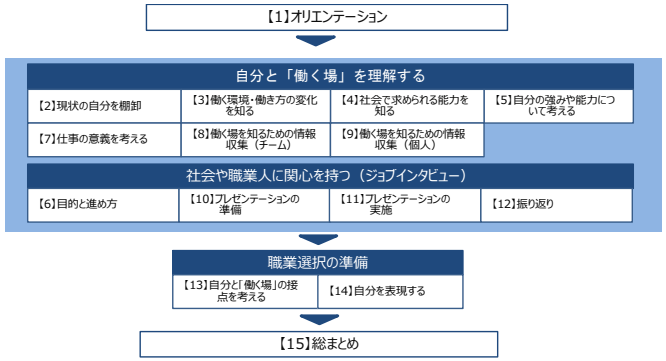


図１ 「自立と体験４」授業内容

2．実施結果

2.1　開講曜日・時限

3 年生前期科目として、明星教育センター特任･常勤教員 7 名で 8 クラスを開講した。国際コミュニケーション学科、経済学科、心理学科の 3 学科は卒業要件単位に認定される科目としている。授業の開講曜日時限は表 1 の通りである。

表 1　開講曜日時限　　（　）はクラス数

開講曜日時限	教員数	人数	開講曜日時限	教員数	人数
月曜日 3 限（2）	各 1 名	48	木曜日 3 限（1）	1 名	12
水曜日 1 限（1）	1 名	6	金曜日 3 限（2）	各 1 名	21
水曜日 5 限（1）	1 名	24	金曜日 4 限（1）	1 名	9
			全体（8 クラス）		**120**

※履修者人数は、4 月 22 日（月）現在のものである。

※協同学習の効果を高めるために開講時人数が 6 名未満のクラスについては他のクラスに移動を依頼した。結果、本年度は当初予定していた木曜日 3 限は 1 クラス減となった。

2.2　履修者数及び単位修得状況

2019 年度の履修者数は、120 名であった。昨年度の 144 名と比べて 17%減少した。単位習得率については、履修者 120 名から全欠席者 2 名、休学者 2 名、退学者 1 名を除いた 115 名で計算している。学部学科別人数は表 2 の通りである。単位修得者は 109 名で、単位修得率は 94.78%だった。

表 2　学部学科別履修者数と単位修得者数

学部学科名	2019 年度		2018 年度	
	履修者	単位修得者	履修者	単位修得者
理工学部総合理工学科物理学系	1	0	4	2
理工学部総合理工学科生命科学・化学系	4	4	0	0
理工学部総合理工学科機械工学系	1	1	1	0
理工学部総合理工学科電気電子工学系	0	0	2	2
理工学部総合理工学科建築学系	1	1	0	0
理工学部総合理工学科環境科学系	0	0	0	0
人文学部国際コミュニケーション学科	51	50	61	56
人文学部人間社会学科	2	1	0	0
人文学部心理学科	0	0	1	1
人文学部日本文化学科	2	1	3	3
人文学部福祉実践学科	0	0	0	0
経済学部経済学科	42	41	67	62
情報学部情報学科	1	1	1	1
教育学部教育学科	1	1	3	3
経営学部経営学科	0	0	1	1
デザイン学部デザイン学科	3	2	0	0
心理学部心理学科	6	6	0	0
総計	115	109	144	131
単位修得率	94.78%		96.61% ※	

※ 履修登録者 144 名のうち授業に一度も出席していない学生はいなかった。

2.3　出席率

2019 年度の出席率の平均は 78.9%だった。昨年度の 77.5%と比較すると 1.4 ポイント上昇した。最も高かったのは、第 2 回目の 85.0%、最も低かったのは第 8 回目の 70.0%であった。授業回毎の出席率は図 2 の通りである。昨年度はジョブインタビュー終了直後に出席率が下がる傾向が見られたが、本年度は授業回を後ろ倒しにしたこともあり、最後まで安定した出席率となった。

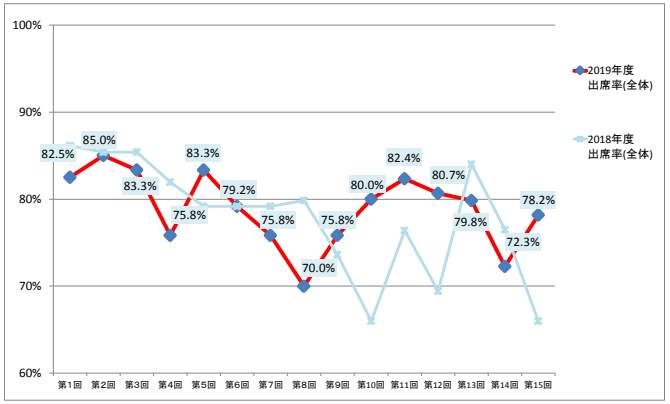


図 2　2019 年度　出席率

3．授業評価

3.1　授業アンケート

授業改善を目的として、第 15 回授業時に、出席者に対して「自立と体験 4 」オリジナルの学生アンケートを記名式で実施している（詳細は【資料 2】を参照）。

以下、授業アンケートついて考察する。

(1) 授業評価

受講後アンケート回答者の 99%(昨年 99%)が､「自立と体験 4 」の授業へ参加して「良かった、やや良かった」と肯定的に回答した。

自由記述欄には、自己理解の深まりや将来や就職に対する意識の変化、そして授業内容の役立ち感に関する記述が多くみられた。具体的には、「就活のこと、自分自身について深く考えられるよい機会だった」「就職活動への意識が高まった」「今までまったく自分の将来や自分自身について考えることはなかったから」「今後やるべきことを考えたり、行動に移すきっかけとなった」「授業を通して職業について学べた」「社会に出たときのことが色々わかることができた」等の記述があった。それ以外にグループワークや学部学科混合クラスに関する内容として、「グループワークがとてもやりがいがあった」「色々な人達との情報が共有できた」との記述がみられた。

「あなたはこの授業にどのように取り組みましたか？」との質問に対して「非常に積極的に取り組めた、積極的に取り組めた」と肯定的回答は 87%と昨年 80%と比べ 7 ポイント高かった。また、「この授業に出席して就職活動に対する意識は高まりましたか?」との質問には肯定的回答が 98%であり、「大いに高まった」が 58%と昨年 50%と比べ 8 ポイント増加した。

特に印象に残った授業について例年同様ジョブインタビューに関わる各種取り組みに対するコメントが半数以上を占め、「社会人とのやり取り」「働く人の現状理解」「他業種理解」「プレゼンテーション」等を通じて多くの学習をしたことを記述していた。

(2) キャリア意識、仕事・職業意識

自分の生き方や社会に出て働くことについては、「授業を通して自分の生き方を考えるきっかけになった」との質問に対して肯定的に回答した学生は 84%（昨年 94%)、「自分が社会に出て働き、貢献するイメージが持てた」への肯定的回答は 82%（昨年 88%)、「社会に出て働くことの中に、楽しさを見つけることができた」への肯定的回答は 83%（昨年 86%）といずれも昨年度と比べ下がっていた。

「様々な仕事について理解が深まった」への肯定的回答は 96%(昨年 97%)、「自分にあった職業を探したいと思うようになった」への肯定的回答は 100%(昨年 97%)であった。その中でも「自分にあった職業を探したいと思うようになった」については前述のとおり「とてもそう思う」の回答が昨年度より 9 ポイント高い結果となった。

以上の結果から、自分の生き方や社会に出て働き貢献できるイメージや働くことの楽しさについて考えられない学生もみられたが、多くの学生が授業をきっかけに考えを深めることができていた。また、今年の学生の傾向として受講のきっかけに「就職活動への不安」をあげる学生が多いこと（(4)その他参照）や「自分にあった職業を探したい」との回答が増えたことから、長期的な視点で将来や働くことについて考えるよりも目前の就職活動という短期的な視点でこの授業を捉え受講していたことがうかがえる。

(3) 獲得した意識と能力

この授業を通して伸びたと思うスキルについての質問（複数回答）では、聴く力（49%)、チーム活動（36%)、プレゼン力（35%)、情報収集の仕方(35%)が高かった。

(4) その他

卒業後の進路は、具体的にイメージできていると回答した学生が 48%であり、約半分以上の学生が卒業後の進路についてまだイメージできていなかった。「この夏休み、インターンシップに参加する予定があるか」については 68%の学生が参加したいと回答していた。「インターンシップ以外での就職活動のための計画」では、進路について親や家族と相談するが 34%であり、次いで筆記試験や SPI の勉強が 28%、仕事研究と資格の勉強はそれぞれ 14%であった。

受講のきっかけ（複数回答）については、「就職活動に不安があった」と回答した学生が 30%と最も高く、次に「自立と体験３を受講したから」と回答した学生が 19%、「卒業要件単位になるから」と回答した学生も 19%であった。

「就職活動に不安があった」と多くの学生が回答したことについては、消極的な姿勢という側面だけでなく、準備の必要性を感じているという見方もできる。現状の受講のきっかけを問う項目では、就職活動に対して積極的な姿勢を持つ学生がどれだけいるか見ることができないため、次年度に向けて設問項目を検討したい。

3.2　教員からの評価

担当した教員から授業内容や運営面について以下の指摘があった。

(1) 授業内容について

・ジョブインタビューについては、ここ数年同様にしっかりと取り組む学生が多かった。しかし中にはインタビュー対象者の検討において、興味のある仕事や働き方を具体的に絞るのが難しく苦労する学生も見られた。
・ジョブインタビューは、個人が発表にしっかり取り組むだけでなく他のメンバーの発表にも興味深く聴く姿勢が見られ、熱心に相互のフィードバックを行っていた。

・第 3 回「働く環境・働き方の変化を知る」や第 8 回、第 9 回「働く場を知るための情報収集」については、学生が考える上でそもそも社会の仕組みや業界のことなど前提となる知識が少ないため、あらかじめ必要な情報や全体像を示してから深堀りしていった方がより効果の高い授業になるのではないかという意見が聞かれた。
・本年度から取り入れたセルフリーダーシップの発揮については、教員によっては十分に学生に意識させ、浸透させるところまではいかなかった。

(2) 運営面について

・例年生じるクラスによる履修者数のばらつきについて、教員毎に必要な講義や演習を適宜取り入れ、個別フォローをしながら全体の授業運営を円滑に進めるなどの工夫が見られた。
・基本的な提出物については期日をしっかり守り、課題についてもきちんと取り組む学生が多かった。
・レポート課題については、例年同様に基本的文章力を鍛えるために外部講師に添削を依頼した。しかし、授業の中だけで文章力向上に取り組むのは限界があるため、今後の添削については実施する目的や位置づけを検討する必要がある。

4．次年度に向けて

次年度の授業実施に向けて、下記の 3 点について今後検討をしていきたい。

(1) 体系的キャリア教育としての「自立と体験 3B」授業プログラムを再構築する

次々年度より、全学共通社会的・職業的自立促進科目「自立と体験４」はキャリア形成科目「自立と体験 3B」に変更となる。体系的キャリア教育としての「自立と体験 3B」の位置づけやあり方を明星教育センター内で議論し、全体の授業プログラムの再構築を考えたい。

(2) 授業目的や授業内容を分かりやすく整理する

現在、ジョブインタビュー演習を中心に勤労観や職業観を育成するための様々な要素が授業の中に組み込まれている。次年度は、授業の目的やねらいを整理して内容をシンプルにし、学生へのメッセージを分かりやすくしていきたい。

(3) 自立的に進路を考え、自ら進める態度・思考・行動の育成を図る

自立的に進路を考え、自ら進める態度・思考・行動の育成を図るために本年からセルフリーダーシップの発揮について取り入れたが、具体的に授業内容に反映させることはできなかった。15 回を通して意識づけできるような仕掛けを考えたい。

以　上

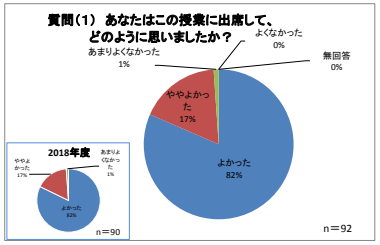
【資料1】2019年度「自立と体験４」授業内容

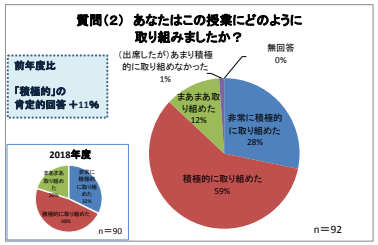
回	授業名	内容
1	オリエンテーション 【授業全体の概要】	ねらいを理解する ゴールをイメージする
2	現状の自分を棚卸	過去の経験から仕事に関しての「WILL CAN MUST」を整理する
3	働く環境・働き方の変化を知る	雇用を取り巻く環境変化や今後働く上で大切なことを知る
4	社会で求められる能力を知る	社会人、職業人として求められる能力を知り、現状自分と対比してみる
5	自己の強みや能力についてを考える	自分の現状能力を多角的に考え客観視する
6	ジョブインタビュー1	ジョブインタビュー準備・質問力を身につける
7	仕事の意義を考える	自分が仕事をすることについて「働く人のやりがい」を考える
8	働く場を知る為の情報収集 【チームで調べる】	情報収集の方法を知る 「働く場」と仕事を知る
9	働く場を知る為の情報収集 【個人で調べる】	「働く場」や仕事について多くのチャネルを活用して自ら調査する
10	ジョブインタビュー2 【プレゼンテーションの準備】	プレゼンテーションの基本理解
11	ジョブインタビュー3 【プレゼンテーションの実施】	プレゼンテーションの体験する 他者の発表から様々な人の仕事観を考える
12	ジョブインタビュー4 【振り返り】	ジョブインタビューの内容や手法からの学びを整理する
13	自己と「働く場」の接点を考える	職業についての情報と自己の拘りや方向性の接点を考える
14	自分を表現する	現在の自分を表現する 将来の自分を表現する 模擬面接を体験する
15	総まとめ	今後の方向性を考える アクションプランを作成する

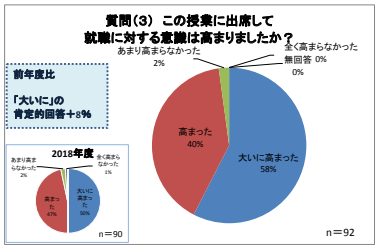
【資料2】2019年度「自立と体験４」アンケート結果

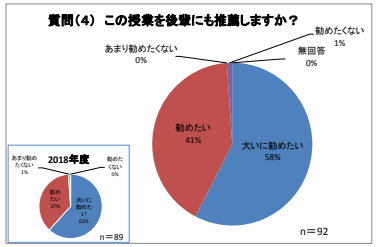
例年通り記名式でアンケートを実施した。履修者120名のうち、回答者は92名だった。また、図の作成にあたり、未提出者・無回答者は除いている。

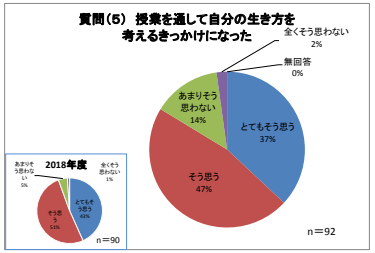
なお、昨年度と±5ポイント差がある項目については、コメントをつけている。

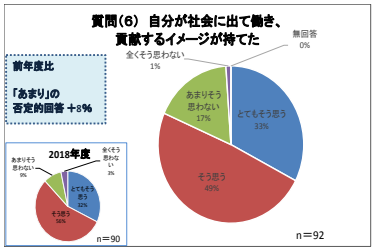


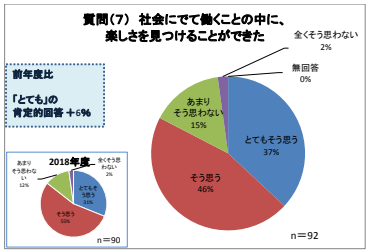


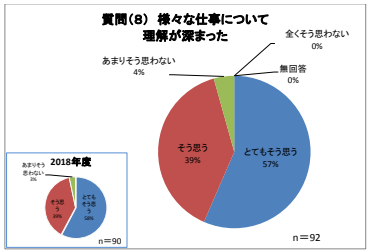


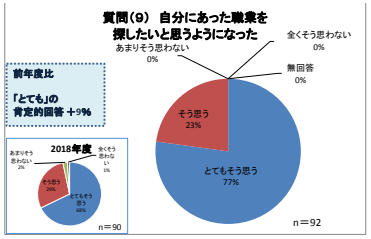


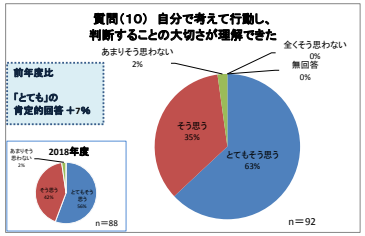


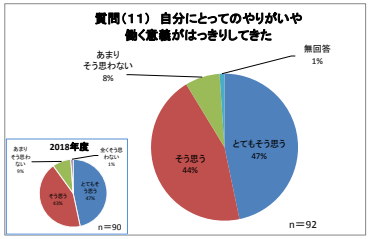


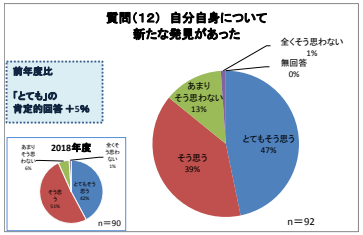

質問（7） 社会にでて働くことの中に、楽しさを見つけることができた
前年度比
「とても」の肯定的回答 +6%
全くそう思わない 2%
無回答 0%
あまりそう思わない 15%
とてもそう思う 37%
そう思う 46%
2018年度
n=90
n=92

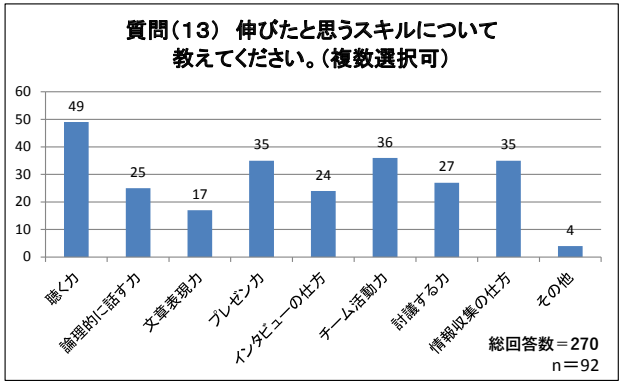

質問（8） 様々な仕事について理解が深まった
全くそう思わない 0%
無回答 0%
あまりそう思わない 4%
そう思う 39%
とてもそう思う 57%
2018年度
n=90
n=92

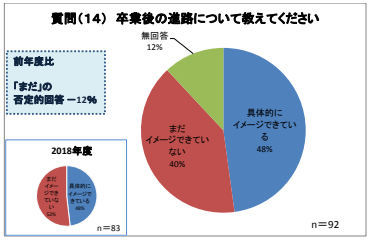

質問（9） 自分にあった職業を探したいと思うようになった
前年度比
「とても」の肯定的回答 +9%
全くそう思わない 0%
無回答 0%
あまりそう思わない 0%
そう思う 23%
とてもそう思う 77%
2018年度
n=90
n=92

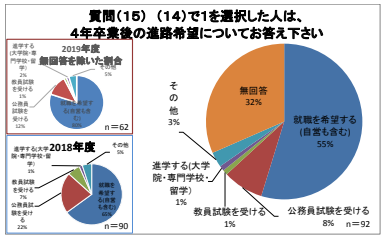

質問（10） 自分で考えて行動し、判断することの大切さが理解できた
前年度比
「とても」の肯定的回答 +7%
全くそう思わない 0%
無回答 0%
あまりそう思わない 2%
そう思う 35%
とてもそう思う 63%
2018年度
n=88
n=92

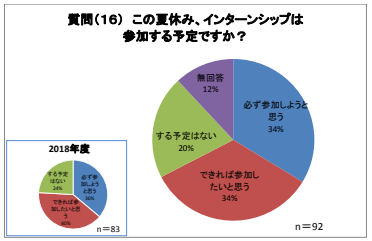

質問（11） 自分にとってのやりがいや働く意義がはっきりしてきた
無回答 1%
あまりそう思わない 8%
そう思う 44%
とてもそう思う 47%
2018年度
n=90
n=92

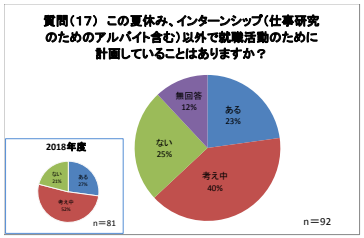

質問（12） 自分自身について新たな発見があった
前年度比
「とても」の肯定的回答 +5%
全くそう思わない 1%
無回答 0%
あまりそう思わない 13%
そう思う 39%
とてもそう思う 47%
2018年度
n=90
n=92

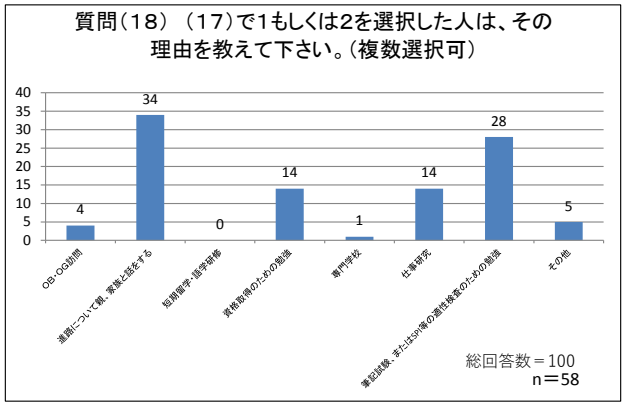

質問（13） 伸びたと思うスキルについて教えてください。（複数選択可）
60
50
40
30
20
10
0
49
25
17
35
24
36
27
35
4
聴く力
論理的に話す力
文章表現力
プレゼン力
インタビューの仕方
チーム活動力
討議する力
情報収集の仕方
その他
総回答数＝270
n＝92

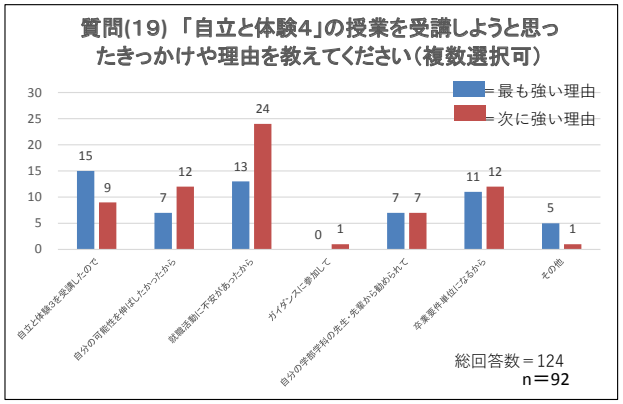

質問（14） 卒業後の進路について教えてください
前年度比
「まだ」の否定的回答 −12%
無回答 12%
まだイメージできていない 40%
具体的にイメージできている 48%
2018年度
n=83
n=92

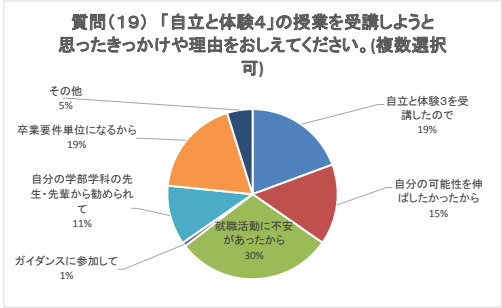

質問（15） （14）で1を選択した人は、4年卒業後の進路希望についてお答え下さい
2019年度 無回答を除いた割合
n=62
2018年度
n=90
無回答 32%
就職を希望する（自営も含む） 55%
その他 3%
進学する（大学院・専門学校・留学） 1%
教員試験を受ける 1%
公務員試験を受ける 8%
n=92


質問（16） この夏休み、インターンシップは参加する予定ですか？
無回答 12%
必ず参加しようと思う 34%
する予定はない 20%
できれば参加したいと思う 34%
2018年度
n=83
n=92


質問（17） この夏休み、インターンシップ（仕事研究のためのアルバイト含む）以外で就職活動のために計画していることはありますか？
無回答 12%
ある 23%
ない 25%
考え中 40%
2018年度
n=81
n=92


質問（18） （17）で1もしくは2を選択した人は、その理由を教えて下さい。（複数選択可）
40
35
30
25
20
15
10
5
0
4
34
0
14
1
14
28
5
OB・OG訪問
進路について親、家族と話をする
短期留学・語学研修
資格取得のための勉強
専門学校
仕事研究
筆記試験、または外国の適性検査のための勉強
その他
総回答数＝100
n＝58



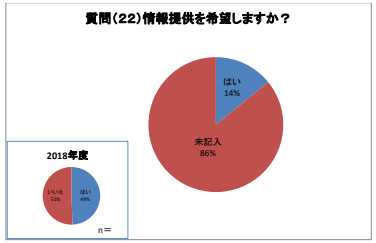


質問(２０)　「自立と体験４」の授業の中で最も印象的だったことを挙げて下さい。

・ジョブインタビュー。自分でインタビューしたこともそうだけど発表を聞くことが何よりも勉強になった。
・自己 PR がない。ショックが大きかったです。
・ジョブインタビューです。アポをとる事からむずかしくて１番身近なバイトの店長になってしまったけど聞いてみたら店長でよかったと思えた。
・ジョブインタビューを通して、今社会人として働いている方と話をすることができました。同時に、自分の働く上で大切にしたいことを確認することができました。
・ジョブインタビューの実施。自立と体験４を受講しなければできなかった貴重な体験だと感じたため自身のイメージと現実のギャップ・やりがいや給与面など幅広く学ぶことが出来た。
・先生がしっかりと学生を見ていて一人ひとりにしっかりとしたアドバイスをうまく聞き入れやすい言い方で伝えていてとてもすごいなと思った。
・先生の話す内容がとても関心を持ち成功者はこういう考え方をして行動するんだなと思った。
・Job インタビュー：自分が入りたい業界について生の声を聞けるいいタイミングだった。全く知らなかった業界についても知ることが出来とても楽しかった
・B-B、B-C などの自分の知らない業界
・自己分析、面接練習

質問(２１)　「自立と体験４」の授業について改善点や要望（こんな内容を入れて欲しい等）があれば教えてください。

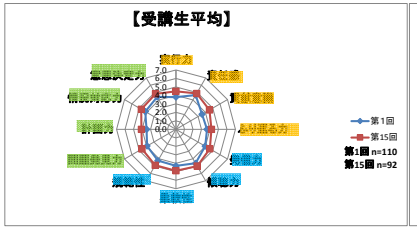
・強いて言うなら、授業を履修する前に面談などを行い、特定の生徒が受けられる授業にすること。そのようにすることで、もっとキャリアを深く考えられる良い授業になると思います。
・人数が多い場合は人数制限をかけても良いと思います。
・プレゼン　コミュニケーション
・先生はグループワークで、もう少し携帯とかを注意したほうが良い。
・課題が減ったらうれしいくらいです。
・もっと積極的に意見を言えれば良かった。
・気になる業種についてもっと詳しく調べる内容。
・人前で話す経験は良いと思った
・ゲストの招聘。
・面接練習した際に細かいことが言えなかったので克服したい。

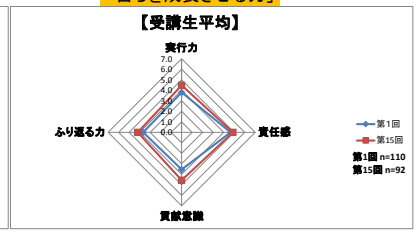


2019 年 10 月 10 日学部長会資料

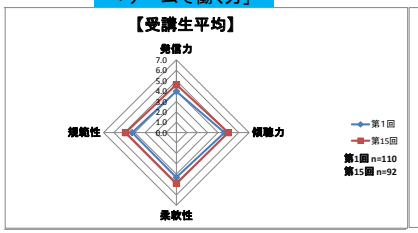
【資料 3】2019 年度「自立と体験４」社会人基礎力自己判定

「自らを成長させる力」

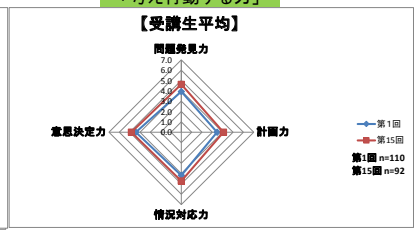




「チームで働く力」



「考え行動する力」



	「自らを成長させる力」について				「チームで働く力」について				「考え行動する力」について			
	実行力	責任感	貢献意識	ふり返る力	発信力	傾聴力	柔軟性	規範性	問題発見力	計画力	情況対応力	意思決定力
第1回平均	3.8	4.7	3.5	3.7	4.0	4.6	4.3	4.3	3.9	3.5	4.2	4.4
第15回平均	4.5	4.9	4.6	4.2	4.6	5.0	4.9	4.9	4.6	4.1	4.7	4.8

2020 年 3 月 12 日・学部長会資料

学長　大橋　有弘　殿

担当副学長　菊地　滋夫
明星教育センター長　西本　剛己

2019 年度 全学キャリア形成科目「キャリアデザイン A」授業実施報告書

Summary（概要）

- 今年度の「キャリアデザイン A」は、1 クラスで開講し履修者は 133 名であった（全欠席者除く）。平均出席率は 79.2%、単位読み替えのある学科のみの出席率は、83.0%、その他の学科は 64.2%であった。単位修得率は 80.7%（113 名）であったが、単位読み替えのある学科 83.3%に対して、その他の学科は 57.1%であった。
- 終了時アンケートでは、授業の到達目標達成である、意識の醸成、キャリアデザインに関する知識・方法の獲得、学習内容の日常生活での活用は 80%以上の学生が肯定的に回答した。「授業に出席してよかった」「この授業を後輩に推薦したい」に肯定的に答えた学生は、ともに 95%以上であり、満足度も高かった。
- 全体として、学生たちは、興味のある心理やコミュニケーションやキャリアについて学び、自分を見つめ直し、就活や将来に向けて前向きな気持ちになれた。また、他学年や他学部の人と沢山話すことができ、その体験を楽しみ、自分のためになると感じていた。
- 次年度への課題として、①グループワークの質を高める働きかけの継続、②SA の活用、③時間配分の見直し（大人数授業に適した運営の検討）が挙げられる。それにより、授業の質を高め、学生の主体的な学びを深めていきたい。

1　授業概要

1.1　教育目標

（1）キャリアデザインの理論学習に基づき、キャリアの考え方を知る
（2）個人ワーク、グループワークを行い、自身の勤労観・職業観を育成する
（3）社会に出て働くことの様々な側面について知る

1.2　行動目標・到達目標

（1）卒業後に社会人として活躍していくために必要な意識が醸成される
（2）キャリアに関する知識や理論を学び、自身のキャリアを考える方法が身につく
（3）キャリアについての考え方を、他者に説明できる

1.3　授業内容（前年度からの変更点・工夫をした点）

（1）2018 年度を終えての課題として、①授業内容のブラッシュアップ、②グループワークの質を高める働きかけの導入、③SA の活用を挙げ、授業内容や授業の進め方を工夫した。（具体的には、(2)～(4)を実施した）。
（2）授業内容として、新たに「アンコンシャスバイアス」（自分の能力に対するネガティブな刷り込み）に関する話題を入れた。
（3）履修者が例年になく多かったため、それに合わせて授業の進行やワークシート類を工夫して学生へのわかりやすさに努めた。
（4）SA を 3 名体制とし、座席位置ごとに分担して、責任をもって対応してもらった。

2　実施結果

2.1　開講曜日・時限・設置クラス等

2019 年度も 1 クラス開講（後期金曜 3 限）とし、2 名の教員による分担で実施した。それにより、昨年度学生アンケートでも評価の高かった「多様性のあるクラス状況」を確保した。

今年度は当初 180 名を超える学生が履修登録を行ったため、SA（学部 3～4 年生）を 3 名採用し、授業のサポート役を担ってもらった。

2.2　履修者数

後期の履修訂正期間を経て、履修者数は 140 名（2018 年度 76 名、2017 年度 115 名）となった。詳細は以下表 1 の通り。

履修者 140 名中、15 回全欠席者 7 名を除いた実履修者数は 133 名（2018 年度 61 名）である。133 名の学年別内訳は、1 年 84（22）名、2 年 20（20）名、3 年 28（10）名、4 年 3（9）名であった（括弧内は 2018 年度人数）。

また自由科目であるが、2019 年度入学の国際コミュニケーション学科、福祉実践学科、経済学部、経営学部、デザイン学部、心理学部および、2018 年度以前入学の国際コミュニケーション学科、心理学部は、科目の読み替えを行っているため、卒業単位に認定される。単位認定される学部学科の実履修者は 106 名で実履修者の 79.7%（2018 年度 52.5%）、それ以外は履修者が 33 名、全欠席者 6 名を除く実履修者は 27 名であった。

（表 1　履修者の詳細）

学部学科		1 年		2 年		3 年		4 年		合計	
理工	物理		14 (1)	1	1	(1)	1 (1)			2	16 (2)
	機会工学	2								2	
	生命科学	2								2	
	電子電気	9(1)								9(1)	
	建築										
	環境科学	1								1	
人文	国際コミュ		11 (1)	6	6 (1)	25(1)	25 (1)	3	3	35	45 (3)
	日本文化										
	人間社会	(1)		(1)						3	
	福祉実践	11								11	
情報				5						5	
経済		5		5						10	
教育											
経営		33		1(1)				(1)		35(2)	
デザイン		1		1						4	
心理		20				2				20	
合計		84(2)		20(2)		28(2)		3(1)		133(7)	

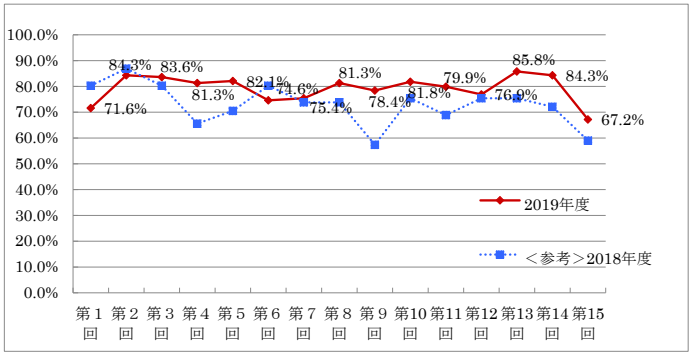
※（　）内の数字は、15 回全欠席者（7 名）に当たる人数。
※　網掛けのセルは、学科科目としての単位認定を行っている学部学科と該当学年。

2.3　出席率

平均出席率は 79.2%（2018 年度 73.0%、2017 年度 71.7%）であった。最高は 85.8%（第 13 回）、最低は 67.2%（第 15 回）であった。出席率の詳細は図 1 参照。例年、学園祭後と最終授業回の出席率が低下する傾向が見られるが、今年度は、レポート提出回とした第 8 回の出席率が高く、その翌週の第 9 回も同じ水準が維持された。一方、授業終盤については、第 14 回のレポート提出回は高い出席率であったが、最終授業での出席率は低下した。

また、単位読み替えのある学科のみの平均出席率は、83.0%（2018 年度 84.8%）、それ以外の学科は 64.2%（2018 年度 60.0%）であった。単位読み替えのない学科の中には、1～2 回しか出席していない者や後半の出席率が低下する者が含まれており、このことが全体の出席率を下げる原因になったと考えられる。

図1　出席率



2.4　単位修得率

単位修得者は113名で、全欠席者を除く単位修得率は80.7%（2018年度75.4%、2017年度75.9%）であった。

単位読み替えのある学科の単位修得率は88.3（91.0）%、単位読み替えのない学科は57.1（57.1）%となり、単位読み替えのある学科とそれ以外では31（34）ポイントの差があった（括弧内は2018年度）。単位読み替えがあるかどうかによる差が非常に大きかった。出席率にも大きな差があった。全欠席者7名のうち6名は単位読み替えのない学科であり、学生の授業への取り組み態度により、単位修得率にも差が出たものと考えられる。

3　授業評価

第15回授業内で、今後の授業改善のための終了時アンケート（記名式）を実施した。回答数は70名（2018年度39名、2017年度77名）であった。アンケートをもとに学生による授業評価を見ていく。

3.1　教育目標の達成

行動目標・到達目標に関し、達成度を4件法で尋ねた。

Q5「キャリアに関する知識や理論を知り、自分のキャリアを考える方法が身についた」に「4：十分に達成された」「3：割と達成された」と肯定的に答えた割合は84.2%（2018年度97.4%）であった。同様に肯定的な回答はQ6「社会に出て働くことの様々な側面について理解し、卒業後に社会人として活躍するために必要な意識を育成することができた」91.5%（2018年度92.3%）、Q7「授業で学んだ知識を他者に説明したり、日常生活で活用できるようになった」84.2%（2018年度84.2%）となった。

Q6、Q7の傾向は昨年と特段大きな変化はないが、Q5については昨年と比べて「あまりそう思わない」との回答が増えた。大人数による授業の中では、「キャリアを考える方法」が身についたという感覚には、ばらつきがあったと考えられる。

Q8「学んだこと、身についたことの自由記述」には、「コミュニケーション能力」「社会人スキル全般」、「社会の辛さ、悪いところも知ることができた」「ストレスとの向き合い方」「未来について考えて少しずつ計画していくこと」「キャリアでの重要なことや、あまり今まで自分が考えたことのなかったものを考えた」「色んな人と関わる中で、多様性やそれを受け入れることの大切さを知った」、「自分の強み・弱み」等の記述があった。

3.2　学生の満足感・反応

(1)学生の受講満足感

Q1「この授業に出席して、どのように思いましたか」は98.5%（2018年度92.3%）、Q4「この授業を後輩にも推薦しますか」には95.7%（2018年度92.3%）が肯定的に回答し、授業に対する満足度は非常に高かった。「とても良かった」と回答した学生たちは自由記述欄に「社会に出たら必要なこと人間としてとても大切なことを学べました」「将来のことを考えたり、今、日常生活で必要なことについても学べた」「色んな人と話して、自分とは違う考え方に触れられた」「視野が広がった」など満足感の感じられる記載をしている。

また、Q2「この授業を履修して良かった点はどのようなことですか」（複数回答）を見ると、「授業が面白かった」を50.0%の学生が選択している。「授業内容が将来の役に立つと思った」が44.3%、「グループ活動」は42.9%、「学部学科混成」、「学年混成」等の多様な受講者層の授業については30%以上が選択した。一方、選択肢の中では、「授業を通していろいろなスキルが身についた」を選択する割合が最も低かった。多様な他者と学ぶことによる意識の変化は実感されたが、スキルが身につくという感覚はあまり得られなかったと考えられる。

後輩に推薦する理由の自由記述は、「将来や自分のことについて考える時間があるから」「キャリアに対する考えを深めてほしいから」「自分と向き合うきっかけづくりとして」「知識を得られるだけでなく、いろんな人とコミュニケーションをとることができるから」等の記述が多くみられた。また、「将来役に立つから」「間違いなく自分のためになる授業である」等の記述もあった。学習したことが自身のキャリアに活用できる、役立つ授業だと感じている様子が分かる。

(2)授業に対する取り組み

Q3「この授業にどのように取り組みましたか」は「非常に積極的に取り組めた」「積極的に取り組めた」が75.7%（2018年度82%）、「まあまあ取り組めた」は29.2%（2018年度17.9%）であり、昨年と比べると、若干「積極的に取り組めた」割合が減少しているが、全体的に積極的に取り組んでいた様子が見られた。「非常に積極的に取り組めた」「積極的に取り組めた」と回答した者の自由記述には、授業内容に興味があったり、グループワークを楽しんだりしている様子が見られる。一方、「まあまあ取り組めた」や「（出席したが）あまり積極的に取り組めなかった」と回答した者の自由記述には、「意欲の無い人とグループになってしまうとあまり良い気分になれなかった」や「グループワークはもう少し積極的に話せばよかった」といった、自らのグループのグループワークの質に満足できていない様子が見られた。

(3)授業内容・進め方について

Q9「授業内容」（各回の授業テーマ・授業内で取り上げた理論の内容や量・教材）は無回答者を除く有効回答者のほぼ全員が肯定的に回答した。

Q11「授業の進め方」（各回の授業構成・グループワークの内容・時間配分等）は、有効回答者全員が肯定的に回答した。

Q10「良かった授業回（複数回答）」では、「第8回モチベーション」は47.1%、「第9回働く上でのストレス」は35.7%の学生が選択している。次いで「第15回今後の計画をたてる」「第10回アサーション」「第13回自分の働き方を考える」と続き、これらはすべて25%以上の学生が選択している。

Q12「良かった授業の進め方」では、「グループワーク」51.4%、「アイスブレイク」は45.7%の学生が選択しており、話し合いや発表の機会に高い評価が見られた。

Q13「グループの座り方（階段教室で前後に座る）」は「グループワークに取り組みやすかった」が47.1%であった。一方、「グループワークに取り組みにくかった」も7.1%であり、「後ろを向くのは話しにくかった」「仲の良い二人がいると入りにくかった」等、座り方やグ

ループのメンバー構成によっては、活動をしにくい状態であったことが示された。

以上、授業内容、進め方については、昨年に引き続き学生の評価を得ることができたと言えることから、基本的な構造は、来年度も同様で良いと考えられる。一方、今年度初めて使用した階段教室での授業運営については、グループ編成、配置等、今後検討すべき点がある。

3.3　教員から見た授業評価

(1)学生の様子

全体として、学生たちは授業内容に興味を持ち、演習等にも積極的に取り組んでいた。「将来のことについてこんなに考える授業はないと感じた」「グループの人の意見を聞いて自分の中に取り組むことができた。等のアンケート記述からも学生の積極的な取り組み姿勢や学びの様子がわかる。

また、「グループで話し合うことで、自分とは違う視点で物事のとらえ方を知ることができ、とても有意義な時間だった」という記述のとおり、グループで話し合うことによる学びの質への満足度は高かった。「コミュニケーション課題」によって、どのような態度をとるべきかが明確に理解できた側面があると考えられる。

(2)授業内容

具体例を挙げる等、より実践的に考えられるようにワークシートを工夫をした「今後の計画をたてる」については、学生の反応が良かった。一方、「働く若者を取り巻く環境」「ダイバーシティ」「キャリアをデザインする」のように、各テーマについて、話すことが中心的な活動の回については、集中して取り組み、深めることが難しかった。これらはいずれも全体の人数が多いために、個々のグループの状況を把握した上で、適切な介入をしたり、全体をコントロールしたりすることができなかったことが影響していると考えられる。大人数クラスので、学び方について工夫が必要だと考えられる。

(3)授業の進め方

基本的な授業の進め方は、昨年同様で問題なかった。しかし、今年度は履修者が多いことによるいくつかの課題が見られた。第一に、配布資料をとって指定の席に着席するまでの時間がかかり授業の開始が遅れがちであったこと、第二に階段状の席で３人組での対話をする体制が作りにくく対話が成立していないグループが発生したこと、第３に特に後方の席で授業に集中できなかったり、離席する学生がみられたこと、などである。使用する教室やレイアウトを含む、授業運営について再検討が必要である。

4　次年度に向けての課題

4.1　グループワークの質を高める働きかけの継続

今年度は、グループ内で話すことはできるが、その質は担保できなかった。そこで、次年度は引き続き、多様な他者と対話できる環境を整えるとともに、授業で取り上げるテーマについて「語ること」の意義を説明し、大人数の中でもグループワークの質が担保されるようにする。

4.2　SA の活用

SA が担当する業務については、今年度は、大人数の授業を円滑に運営するための作業的な対応に集中していたため、先輩学生がいることを十分に活用できない場合もあった。そこで、次年度は、ＳＡにテーマに関連した話をしてもらう等、履修学生との関わりを深め、授業時により活躍できるような体制を整えておく必要があると考える。

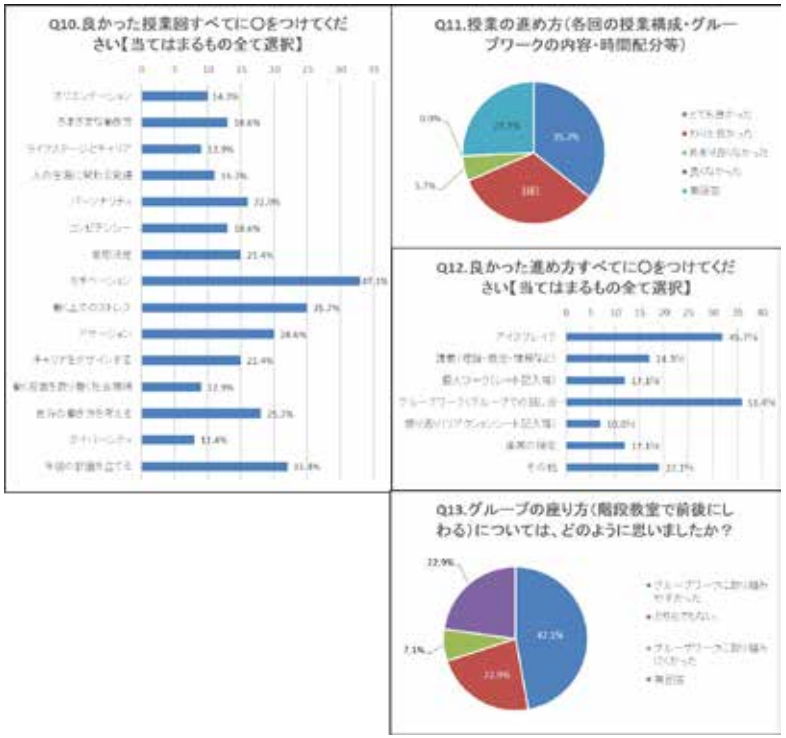
4.3　時間配分の見直し（大人数授業に適した運営の検討）

個人で課題に取り組む時間や、グループでの議論の時間、終了後のリフレクションシートを書く時間が不十分であるとの指摘があった。受講者が多く、授業の開始時間が遅れることも影響している。ワークの構成を変えたり、ペアグループを取り入れる等、大人数授業とい

資料２　2018 年度　「キャリアデザイン１」授業内容

回	担当		授業名	主な内容（ワーク）	レポート
1 9/13	鈴木	キャリアデザインの基本	オリエンテーション	・頭の中をアクティブにして学ぶ ・「キャリア」が付く言葉を考える ・「キャリアデザイン」を定義する	
2 9/20	鈴木		さまざまな働き方	・「仕事」「働くこと」からイメージすること ・目的から見る仕事の３つの側面 ・労働（職業）価値観尺度	
3 9/27	高橋		ライフステージとキャリア	・身近な大人の人生の役割を考える（ﾗｲﾌｷｬﾘｱﾚｲﾝﾎﾞｰ） ・あなたの人生の役割を考える（現在から将来へ）	
4 10/4	高橋	個を理解する	人の生涯に関わる発達	・人の一生における発達を考える ・大学入学後の私の変化	
5 10/11	鈴木		パーソナリティ	・エゴグラムによる自分理解 ・パーソナリティの特徴をつかむ（長所と短所・短所のリフレーミング）	
6 10/18	鈴木		コンピテンシー	・自分のなりたい職種に特徴的な「できる人の条件 ・汎用能力をセルフチェックする（社会人基礎力【明星大学 Ver.】）	中間レポート出題
7 10/25	高橋	キャリアの理論で自分の生き方を考える	意思決定	・私の意思決定プロセスの分析　・ケーススタディ：進路選択に悩む友人へのアドバイス	
8 11/8	高橋		モチベーション	・モチベーションの高い人の行動や考え方　・モチベーションのもとを探そう（モチベーションをあげるためにできること）	中間レポート提出
9 11/15	高橋		働く上でのストレス	・あなたのストレス対処方略（ｺｰﾋﾟﾝｸﾞ）を知ろう　・あなたのサポーターを知ろう　・私のストレス分析シート	
10 11/22	鈴木		アサーション	・アサーティブな表現とは　・アサーションに影響する考え方のクセ　・アサーティブな伝え方（私メッセージ）	
11 11/29	高橋		キャリアをデザインする	・過去の経験を振り返る　・今の自分を見つめなおす ・大きな夢（キャリアの方向性）を描く	
12 12/6	高橋	社会で働く自分を考える	働く若者を取り巻く社会環境	・データの見方（練習）　・データから考える	
13 12/13	鈴木		自分の働き方を考える	・働き方に関する考えやその変化を探る ・社会の現実を知る　・自分の考えを表現する	最終レポート出題
14 1/10	鈴木		ダイバーシティ	・ダイバーシティの考え方を知る ・考え方の多様性を体験する（「はたかちカード」演習）	最終レポート提出
15 1/24	鈴木		今後の計画を立てる	・「私のキャリアデザイン」を表現する⇒ペア共有 ・これからの計画を立てる	

8



7

2020 年 3 月 12 日・学部長会資料

学長　大橋　有弘　殿

担当副学長　菊地　滋夫
明星教育センター長　西本　剛己

2019 年度 全学キャリア形成科目「キャリアデザイン２」授業実施報告書

Summary（概要）

・今年度の「キャリアデザイン 2」は、1 クラス開講し、履修者は 27 名であった。

・単位習得率は 96.3%（昨年 64.3%）であり、平均出席率は 86.7%（昨年 79.0%）と 2016 年開講以降最も高い単位習得率、平均出席率となった。

・終了時アンケートによると、94.7%以上の学生が行動目標・到達目標を達成したと考え、学生の受講満足度も高かった。

・本年度は、授業主旨の理解や事前学習の充実を図るとともに、学生が調査するテーマについて深く探求するために 2 つに絞り込み、外部講師（専門家）2 名を招聘した。

・専門家から学ぶ 2 つのテーマ（自分を守る法律・人生に関わるお金）に対する学生の評価は全員が「とてもよかった」を選択しており、関心の高さがうかがえた。

・本年度の受講生は、総じて授業に取り組む意識や意欲が高く、グループワークにおいても相互に役割を発揮し、昨年度まで課題であった調査内容のプレゼンテーションの質の向上が見られた。

・次年度の課題として、本年度に引き続き①近未来を想定しての「労働環境変化」に伴う法律問題②お金に対して公的な支出理解の促進③（グループワークの充実を図るために）学部と連動しての受講者数の確保に取り組みたい。

1　授業概要

1.1　教育目標

社会で直面する問題についてのケースワークを行いつつ、チーム活動で多様な考えにふれ、勤労観、職業観を育成するとともに、社会で働く上で必要な基礎的知識を学ぶ。

1.2　行動目標・到達目標

(1)生きていく上で必要な、働くに関する法律、労働問題、お金についての基本的な考え方、姿勢を身につけること

(2)各課題について、チームで自律的に学習することにより、主体性、当事者意識、現実的対応力を身につけること

1.3　授業内容（前年度からの変更点）

(1) 前年度は、「働くことに関わる法律」、「多様な働き方」、「人生に関わるお金」に関する３つのテーマで３名の外部講師（専門家）を招聘したが、今年度より「働くことに関わる法律」と「多様な働き方」の２つに絞り込み、２名の専門家で実施した。

(2)2 回目において、法律やお金について学ぶ動機づけとして「豊かな人生」とは「豊かな

人生に必要なこと」を考えるワークを取り入れた。

(3)3 回目の授業で、労働を取り巻く環境変化（労働市場や働き方改革）等のレクチャーを行い基礎知識の共有化を図った。

(4)4 回目に、ブラックバイト等の事例研究を通じて、「何が問題なのか」を多角的に考えるワークを取り入れた。

(5)専門家の講義に入る前に事前に学生に質問事項を考えさせ、当日に Q&A の時間を設定した。

(6)「人生に関わるお金」について調査するグループワークについては、よりリアリティを持たせるために、個々の理想のライフスタイルに分かれてメンバー構成を行った。

2.1　開講曜日・時限・設置クラス等

2019 年度は 1 クラス開講（後期金曜 4 限）、2 名の教員で実施した。

2.2　履修者および単位修得状況

後期の履修訂正期間を経て、履修者数は 27 名となった（全欠席者なし）。また、単位修得者は 26 名で、単位修得率は 96.3%だった。詳細は以下表 1 の通りである。

また自由科目であるが、デザイン学科は科目の読み替えを行っているため、卒業単位に認定される。前回の課題を踏まえて、デザイン学部教員にも後期の履修変更期間に授業履修促進の案内を依頼しそれに対応していただいたことが受講者増加につながった。

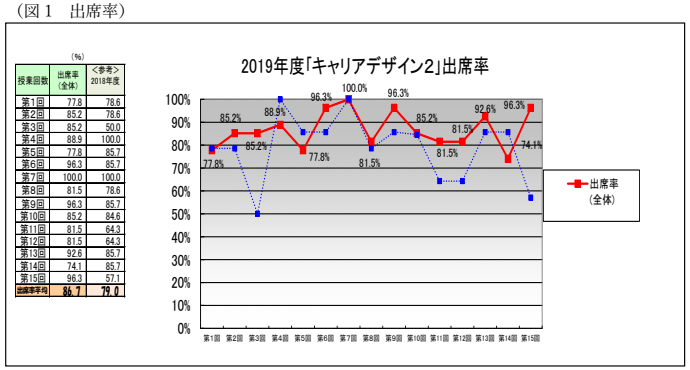
（表 1　履修登録者数および単位修得率の詳細）

学部・学科・学系		2019 年度					2018 年度			
		4 年	3 年	2 年	合計	単位修得率	3 年	2 年	合計	単位修得率
理工	物理学系	0	0	0	0	—	0	0	0	—
	生命科学・化学系	0	0	0	0	—	0	0	0	—
	機械工学系	0	0	0	0	—	0	0	0	—
	電気電子工学系	0	0	0	0	—	1	0	1	100%
	建築学系	0	0	0	0	—	0	0	0	—
	環境・生態学系	0	1	1	2	100%	0	1	1	100%
人文	国コミ	0	0	1	1	100%	0	1	1	0%
	日本文化	1	1	0	2	50.0%	0	0	0	—
	人間社会	0	0	0	0	—	0	1	1	100%
	福祉実践	0	0	0	0	—	0	0	0	—
	心理	0	0	0	0	—	0	0	0	—
経済	経済	0	2	0	2	100%	4	1	5	20.0%
経営	経営	0	0	0	0	—	0	1	1	—
情報	情報	0	1	0	1	100%	0	0	0	—
教育	教育	0	0	1	1	100%	0	0	0	—
デザイン	デザイン	1	3	10	14	100%	2	2	4	100%
心理	心理	0	3	1	4	100%	0	0	0	—
		2	11	14	27	**96.3%**	7	7	14	64.3%

2.3　出席率

平均出席率は 86.7%であり、2018 年度（79.0%）と比べ上昇した。最高は 100.0%（第 7 回）、最低は 74.1%（第 14 回）であった。出席率の詳細は図 1 を参照。

（図 1　出席率）



（%）

授業回数	出席率（全体）	<参考>2018年度
第1回	77.8	78.6
第2回	85.2	78.6
第3回	85.2	50.0
第4回	88.9	100.0
第5回	77.8	85.7
第6回	96.3	85.7
第7回	100.0	100.0
第8回	81.5	78.6
第9回	96.3	85.7
第10回	85.2	84.6
第11回	81.5	64.3
第12回	81.5	64.3
第13回	92.6	85.7
第14回	74.1	85.7
第15回	96.3	57.1
出席率平均	86.7	79.0

2.4　単位修得率

履修登録者 27 名中、単位修得者は 26 名、単位未修得者は 1 名だった。単位修得率は 96.3%であり、2018 年度（79.0%）と比較して大幅に上昇した。

3　授業評価

第 15 回授業内で、今後の授業改善のための終了時アンケート（記名式）を実施した。回答数は 19 名であった。アンケートをもとに学生による授業評価を見ていく。

3.1　教育目標の達成

行動目標・到達目標に関し、達成度を 4 点法で尋ねた。

Q5「職業に就いて働いていくために必要な職業や労働に関する様々な基礎的知識を習得することができた」に「4:とてもそう思う」、「3:そう思う」と肯定的に答えた割合は 100%であった。Q6「社会に出て働くことの様々な側面について理解し、卒業後に社会人として活躍するために必要な意識を育成することができた」に「4:とてもそう思う」、「3:そう思う」と肯定的に答えた割合は 89.5%であった。また、Q7「その他学んだこと、身についたこと」についての自由記述には「副業についての現状や法律知識」「自分が将来どうありたいのかをお金や法律の視点から見直すきっかけとなった」「株・ブラック企業など言葉だけ知っていたことを知れた」「人生のリスクを知れた」「グループワーク能力」「今までに比べてコミュニケーション能力が身に付いたと思う」などの記載があった。以上のことから学生が行動目標・到達目標に関してレベルアップが図られたと考える。また、15 回目に実施した「自分を振り返る回（今後の人生で最も自分に必要と思われること）」では、この授業で学習したことをベースに各人工夫を凝らしてのキャッチコピーや取り組み項目を開示していた。

3.2　学生の満足感・反応

(1)学生の受講満足感

Q1「あなたはこの授業に出席して、どのように思いましたか」、Q 4「この授業を後輩にも推薦しますか」にはいずれも 100%が肯定的に回答し、授業に対する満足度は高いものとなった。また、Q2「この授業を履修して良かった点はどのようなことですか」（複数回答）では、「2: 授業内容が将来の役に立つと思った」が 84.2%、「3: 専門家の話を聞き知識が得られた」が 57.9%、「1: 授業内容が面白かった」が 42.1%であった。さらに、Q4「この授業を後輩にも推薦しますか」の推薦理由について「社会について知るよい機会」、「専門家の話が聞ける」、「自分はどういう仕事をしたいのか考えるきっかけになる」と述べており、社会に出ることや将来のキャリアについての関心が高まったことがわかる。

また、Q1 の自由記述でも、「今まで知ろうとしなかったお金の事や必要なコストを考えるきっかけとなった」「普段しない将来設計を考えられた」「他者の考え方・人生観など聴く機会が少ないので、いろんな意見を愉しみながら知ることが出来た」「グループワークの場数と、将来のための知識が同時に得られる授業」「普段聞けない話が聞けた」という意見があり、授業内容の評価や学生の肯定的な反応が見て取れた。

(2)授業に対する取り組み

Q3「あなたはこの授業にどのように取り組みましたか」への回答は「4：非常に積極的に取り組めた」、「3：積極的に取り組めた」合わせて 78.9%となっている。その理由について、「就職する前に社会について知りたいと思い調査にも積極的になれた」「グループワークを進めていくときの情報共有やプレゼン能力がついた」「資料作りを率先して行うことで発表に協力できた」など積極的に授業に参加したことを自覚的に記述していた。

(3)授業内容について

２つのテーマについての評価は、「4：とても良かった」「3：わりと良かった」と肯定的回答する学生が多かった。テーマ毎に見ると、「働くことに関わる法律」「人生に関わるお金」共に 100%であった。

Q8a 働くことに関わる法律の自由記述では「法律なので少し難しい部分もあったが、自分が働くときにとても重要なのだと思った」「アルバイトをしている自分もしっかり考えておかないといけないと強く感じた」「世間で問題視されているパワーハラスメントについて改めて知ることができたから」と具体的かつ現実的な視点で働くことや働くことに関する法律を学べたようである。

Q8b 人生に関わるお金の自由記述では、「税金や年金を考えるきっかけになった」「プランを仮設定することで理想のためにどの程度お金が必要か知ることが出来た」「お金について計画性が必要と思った」「各種のライフモチベーションに必要なお金を知れた」等、多岐に渡ってコメントがあった。

3.3　教員から見た授業評価

(1)テーマに対しての学生の関心

まだ「働くことを通じての自立」をリアルに実感していない学生にとって、必要と認識しながらも、日頃具体的に考えることが少ない「人生に必要なお金」「働くために必要な法律」というテーマ設定は自分のキャリアを考えるうえで重要且つ関心事の高い授業であったと考える。

また、初回でのクイズ形式の導入やブラックバイトについての多角的な問題意識の共有、事前に専門家への個別質問の投げかけ、そして自分のありたいライフイメージに対して必要なお金を考える」など数々の仕掛けも学生の関心を深めるきっかけになったと考える。

(2)学生の主体的・積極的な学びの姿勢

本年度の受講生は、総じて授業に取り組む意識や意欲が高く、受講態度についても非常にポジィティブであった。グループ発表の準備では、授業内に間に合わない部分について各メンバーで連絡を取り合うなどして、相互に役割を発揮する様子が見られた。その結果

昨年度まで課題であった調査内容のプレゼンテーションの質の向上が見られた。

4　次年度に向けての課題

4.1 授業内容や進め方について

昨年まで「働くことに関わる法律」、「多様な働き方」、「人生に関わるお金」に関する 3 つのテーマで実施していたが、今年度より重複した部分を見直し、2 つのテーマを 2 名の専門家で実施した。その結果、事前学習やグループワーク活動、発表の質も高まったため、次年度も同様に 2 つのテーマで展開をしていきたい。また、それぞれのテーマの中で①近未来を想定しての「労働環境変化」に伴う法律問題、②社会保障制度の変化に伴う「自助・公助・共助」について理解を深める内容を含めることを提案したい。授業の進め方については、専門家から出された課題に対して調査内容を深め、より情報収集の充実を図るため、グループ毎に ipad を使用機材として貸与することも検討したい。

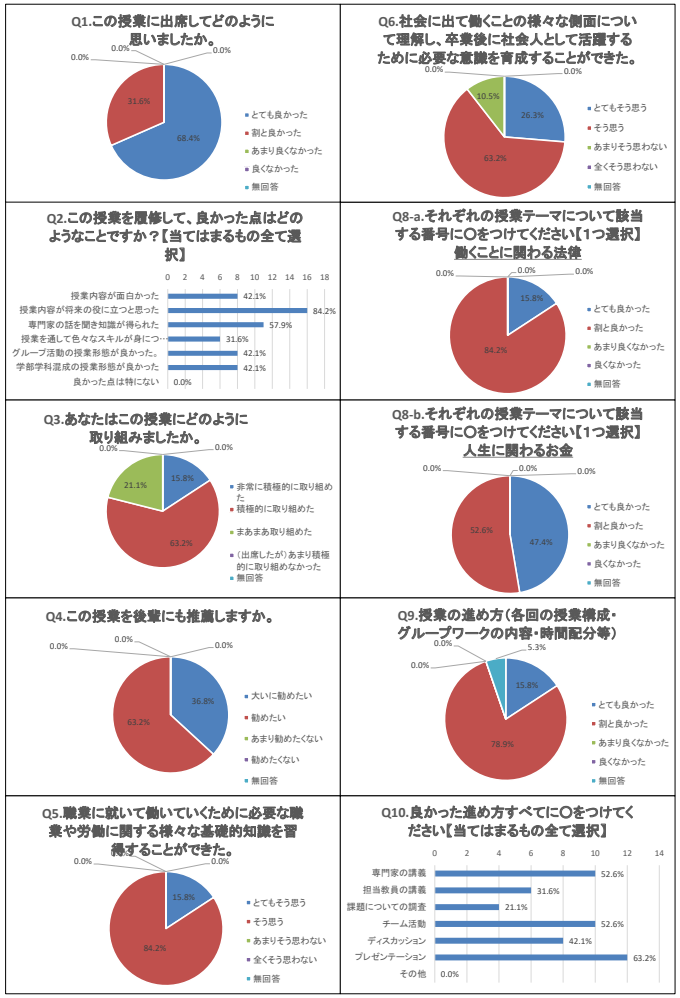
4.2 受講者数を維持する取り組み

次年度の受講者数を維持する取り組みとして、今年度同様に①デザイン学部（卒業単位に認定される）教員と連動した履修の促進、②後期の履修訂正期間中のチラシの配布、③前期「自立と体験 4 履修者へのアプローチ」を継続して実施したい。

添付資料：1．終了時アンケート結果詳細
　　2．授業実施内容一覧

以上

資料 1　終了時アンケート結果詳細（n=19）



資料２　授業実施内容一覧

回	日程	授業内容
1	9月13日	オリエンテーション（授業全体の概要・取り組み方）
2	9月20日	豊かな人生について考える
3	9月27日	働くことの意義について考える
4	10月4日	法律と労働に関わることについて事前調査する
5	10月11日	専門家から学ぶ（テーマ：自分を守る法律の重要性）
6	10月18日	法律と労働に関わることについて調査し、理解を深める
7	10月25日	法律と労働に関わることについてまとめ、整理する
8	11月8日	プレゼンテーション（専門家より論評）
9	11月15日	働き方やお金に関わることについて事前調査する
10	11月22日	専門家から学ぶ（テーマ：多様な働き方や人生に関わるお金）
11	11月29日	働き方やお金に関することについて調査し、理解を深める
12	12月6日	働き方やお金に関することについてまとめ、整理する
13	12月13日	プレゼンテーション（専門家より論評）
14	1月10日	自分のキャリアデザインを考える
15	1月24日	総まとめ

	■第 2 部 在学生の活躍 ●解説・写真パネル ・現在の学生生活（2004～2019 年）（3 枚） ●大型パネル（写真展示） ●写真スライド映像 ■第 1 部・第 2 部共通 ●屏風型パネル（写真展示）
2020 年 3 月 23 日 ～ 2021 年 3 月中旬 ※第 1 期 （2020 年 3 月 23 日 ～10 月下旬） 第 2 期 （2020 年 11 月 3 日 ～2021 年 3 月下旬）	【展示内容】 **準企画展「明星大学明星教育センター設立 10 周年記念** **明星教育の実践をめざして―明星教育センターのあゆみー」** ■第 1 期 ●解説・写真パネル ・明星教育の実践をめざして ―明星教育センターのあゆみー展について ・大学生活の基盤を作る 自立と体験 1 ・社会の課題と出会う 自立と体験 2 ・社会人としての基盤を作る 自立と体験 3A ・就業力を身につける 自立と体験 3B ・理論で考える自己とキャリア キャリアデザイン A ・生き方と法律・労働・お金 キャリアデザイン B ●大型パネル（写真展示） ●写真スライド映像 ※第 2 期は、2020 年 11 月 3 日より展示予定。

2019 年度 明星教育センター 自校教育事業報告

1．明星大学資料図書館（15 号館）明星資料展示室展示

【明星資料展示室概要】

明星資料展示室は、明星大学創立 50 周年記念事業の一つである明星大学資料図書館（15 号館）の耐震工事に伴い、2014（平成 26）年に開設した明星大学の教育・歴史を紹介する展示室である。この展示室では、明星大学創立以来の歴史をテーマ別に紹介する常設展示、明星大学にゆかりのある人物・学生生活やキャンパスの移り変わりなどを紹介する準企画展（年 1 回展示替え）、同フロア（資料図書館 2 階）にある明星貴重書室・明星ギャラリーとの共通テーマのもと、明星大学と明星大学図書館所蔵の貴重書との関係を紹介する企画展示（年数回展示替え）の 3 つ展示スペースからなる。

2019 年度は、準企画展として、同窓生の活躍・在学生の活躍を二部に分けて消化した「写真でみる学生生活の今と昔」展、明星大学明星教育センター設立 10 周年を記念した「明星教育の実践をめざして―明星教育センターのあゆみー」展を開催した。以下、2019 年度の資料図書館明星資料展示室の展示関して、会期・展示内容（テーマ）を報告する。

【明星資料展示室展示記録】

会期	内容（テーマ）
2019 年 11 月 3 日 ～ 2020 年 10 月下旬	【展示内容】 **準企画展「写真でみる学生生活の今と昔」** ■第 1 部 同窓生の活躍 ●解説・写真パネル ・明星大学の学び （ 1964～1973 年） ・部活動・愛好会・サークルと星友祭（1966～1973 年） ・明星大学の学び（1974～1983 年） ・部活動・愛好会・サークルと星友祭（1974～1983 年） ・明星大学の学び（1984～2003 年） ・部活動・愛好会・サークルと星友祭（1984～2003 年） ●大型パネル（写真展示）

２．自校史資料の収集状況

明星大学明星教育センターでは、明星大学の建学の精神・沿革等に関わる歴史資料を収集し、過去・現在・未来をつなぐ貴重な資料として、保存・管理を行っている。資料の収集は、明星教育センターが開設した 2010 年より、徐々に行われていたが、台帳登録等での保管は、2012 年より開始され、現時点で以下のように整理されている。

■ 資料整理状況（ 2020 年 3 月 16 日時点）

●受入台帳登録･･･5260 件

●資料の保存･･･保存箱での収納数　375 箱

●写真アルバム整理･･･108 冊

資料は、主に紙媒体が多く、保管方法としては、資料のクリーニング（埃払い・除カビなど）を行った後、受け入れ順に受入台帳に登録し、保存用封筒に必要事項を記入し、原本を入れ、さらに保存箱に収納している。紙現像の写真の資料に関しては、項目毎に分け、写真アルバムに収納し、保管している。

資料の収集は、主に学内・学外からの寄贈が多く、2019 年度は、以下の資料群が、寄贈された。

■ 2019 年度 受入資料（2020 年 1 月 31 日時点）

●2019 年 6 月 5 日　創立者 児玉九十・明星大学開学関連資料　124 点（学内寄贈）

●2019 年 6 月 20 日 青梅キャンパス関連資料　47 点（学内寄贈）

●2019 年 8 月 21 日 創立者児玉九十関連資料　1 点（学内寄贈）
明星大学関連冊子　4 点（学内寄贈）
入学記念品・卒業記念品　99 点（学内寄贈）

●2019 年 11 月 13 日 青梅キャンパス関連資料　1092 点（学内寄贈）

●2019 年 12 月 9 日　ザイール ムソシ明星小学校関連資料　26 点（学外寄贈）

上記の資料を含め、現在、未整理分の資料もあるが、スタッフ・学生アルバイト・勤労奨学生の協力のもと、順次保管作業が進められている。

【2019 年度 展示の様子】

■準企画展準企画展「写真でみる学生生活の今と昔」